

広島市の文化財 第19集

広島市安佐南区沼田町所在

# 国重城跡発掘調査報告

1982.3

広島市教育委員会

## 序

広島市の太田川・安川周辺の丘陵地には、私たちの祖先が生活の場を築き、歴史を積み重ねてきた古い時代の住居跡や古墳、山城など数多くの埋蔵文化財が存在しています。

国重城跡は、現在、広島市内で所在が確認されている中世の山城150余りの中の一つで、今般、宅地造成にともない、発掘調査による記録保存をはかることになったものです。

山城の発掘調査は、広島市教育委員会としては初めてであり、また、沼田町域での埋蔵文化財の本格的な調査も、今回初めて行ったものです。

この調査では、当初、城郭関係の遺構を予測していましたが、はからずも同じ場所から、弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる、竪穴式住居跡2軒が検出されました。このことは、空白となっていた沼田町域の古代の様子を知るうえで、貴重な資料を得ることができたといえます。

本報告書が、地域の歴史研究や郷土理解を深めていただくためにご活用願えれば幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたりご指導を賜りました諸先生、ならびに炎天下、連日、発掘に協力していただいた地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年3月

広島市教育長 藤井 尚

## 例 言

1. 本書は、広島市安佐南区沼田町伴における宅地造成工事に伴い、昭和56年4月20日から昭和56年7月31日までの間実施した国重城跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、マルイ不動産株式会社から委託を受けて、広島市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴを幸田淳、Ⅲ－1・Ⅳ－1を中村眞哉、Ⅲ－2・Ⅳ－2を橋本義和が担当した。
4. 本書掲載の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。  
(承認番号昭57中複第56号)

# 目 次

I	はじめ	1	IV	遺物	
II	遺跡の位置と環境	2	1	中世山城	1 4
III	遺構		2	竪穴式住居跡	2 1
1	中世山城	4	V	まとめ	2 3
2	竪穴式住居跡	1 1			

## 図 版 目 次

図版 1	国重城跡航空写真
図版 2	1 遺跡遠景（北から） 2 遺跡近景（東から）
図版 3	1 第 1 郭完掘後（北から） 2 第 1 郭完掘後（南から）
図版 4	1 第 1 郭柱穴列（北から） 2 第 1 郭石段状遺構完掘後（西から）
図版 5	1 第 2 郭断面（南から） 2 第 2 郭礎石完掘後（西から）
図版 6	1 第 2 郭石垣状遺構完掘後 2 第 2 郭コの字型配石遺構
図版 7	1 第 3 郭柱穴列（東側部分） 2 第 3 郭柱穴列（西側部分）
図版 8	1 空堀（北から） 2 縦堀 1 完掘後（西から）
図版 9	1 縦堀 2 完掘後（東から） 2 第 1 号竪穴式住居跡（南から）
図版 10	1 第 2 号竪穴式住居跡（南から） 2 高坏出土状態（北から）
図版 11	土師質土器
図版 12	陶磁器
図版 13	鉄 釘
図版 14	鉄釘及び小札状鉄製品
図版 15	鉄蓋及び鉄滓
図版 16	1 竪穴式住居跡出土土器 2 竪穴式住居跡出土鉄製品

## 挿 図 目 次

第 1 図	国重城跡周辺遺跡分布地図	折り込み
第 2 図	国重城跡地形測量及び遺構配置図	3
第 3 図	国重城跡断面実測図	4
第 4 図	第 1 郭柱穴列実測図	5
第 5 図	第 2 郭断面実測図	6
第 6 図	第 2 郭礎石実測図	6
第 7 図	第 2 郭石垣状遺構実測図	7
第 8 図	第 2 郭コの字型配石遺構実測図	8
第 9 図	第 3 郭柱穴列実測図	折り込み
第 10 図	縦堀 2 実測図	1 0
第 11 図	空堀実測図	1 0
第 12 図	第 1 号竪穴式住居跡実測図	1 1
第 13 図	高坏出土状態実測図	1 2
第 14 図	第 2 号竪穴式住居跡実測図	1 3
第 15 図	土師質土器実測図	1 5
第 16 図	陶磁器実測図	1 6
第 17 図	国重城跡出土鉄釘実測図	1 7
第 18 図	国重城跡出土鉄製品実測図	1 8
第 19 図	竪穴式住居跡関係土器実測図	2 0
第 20 図	竪穴式住居跡出土鉄製品実測図	2 2

# I はじめに

広島市教育委員会は、昭和55年4月より、広島市安佐南区沼田町伴字迫ノ谷所在の国重城跡の宅地造成計画について、造成主であるマルイ不動産株式会社と本遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、遺跡は、宅地造成計画地全域に広がるものであり、設計変更も不可能であることから、記録保存も止むなしとの結論を出すに至った。これにより、広島市教育委員会が昭和56年4月から発掘調査の準備に掛り、4月20日に調査を開始し、7月31日に終了した。

調査は下記の関係者で実施した。

調査委託者 マルイ不動産株式会社

調査主体 広島市教育委員会

調査担当係 広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係

調査関係者 森脇 昭之（社会教育部長）

川崎 良馬（社会教育課長）

佐藤 普門（社会教育課主監）

出羽 宏道（社会教育課文化財係長）

石田 彰紀（社会教育課文化財係主事）

桧垣 栄次（ 〃 〃 〃 ）

池本 公二（ 〃 〃 〃 ）

調査者 幸田 淳（ 〃 〃 〃 調査主任）

中村 眞哉（ 〃 〃 〃 調査担当）

橋本 義和（ 〃 〃 主事補，調査担当）

植田由美子（ 〃 嘱託，整理担当）

調査補助員（敬称路順不同）

本田八重子，小和田富子，富田三枝子，立花一夫，山崎弘美，笠岡弘子，越智勝義，宮原ヤスエ，黒瀬信幸，住川香代子，竹重辰夫，笠岡博，住川努・瀬垣昭義，山本孝義，子安しげ乃，中坪亜紀，土井勝子，住川幸枝，平連佐知子，平連高通，河合淳子

なお、調査委託者であるマルイ不動産株式会社及び、可部郷土史研究会三野丈一氏，沼田公民館長菅原卓男氏ほか職員の方々には、調査を円滑に進めるため多大な御配慮をいただいた。また報告書の作成にあたっては広島県立安西高等学校教諭加藤光臣氏及び、地元在住の国田喜積氏から広範な教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。

調査の経過は下記の通りである。

4月20日～4月28日 測量調査

5月 8日～5月14日 第1号竪穴式住居跡発掘及び実測

5月 8日～5月19日 第1郭及び第2郭排土，遺構検出

5月27日～6月 5日 第2号竪穴式庄居跡発掘及び実測

6月22日～7月 3日 第3郭及び空堀発掘

7月 6日～7月24日 第4郭発掘

7月27日～7月31日 遺構実測



- 1. 國重城跡
- 2. 伴草城跡
- 3. 伴城跡
- 4. 伴文城跡
- 5. 伴止城跡
- 6. 伴城跡
- 7. 藤城跡
- 8. 藤山城跡
- 9. 藤山支城跡
- 10. 戸田城跡
- 11. 己斐新成跡
- 12. 藤原新成跡
- 13. 藤原新成跡
- 14. 藤原新成跡
- 15. 藤原新成跡
- 16. 藤原新成跡
- 17. 相田A遺跡
- 18. 相田B遺跡
- 19. 相田C遺跡
- 20. 相田D遺跡

第1圖 國重城跡周辺遺跡分布地図

## Ⅱ 遺跡の位置と環境

国重城跡は、広島市安佐南区沼田町伴字迫ノ谷に所在し、武田山の西にある通称火山（標高448.3m）から北西に延びる尾根の先端に位置し、標高71m、北側水田面からの比高20mを測る。

本城跡の発掘調査により、4つの郭と3つの縦堀、1つの空堀を確認したが、さらに聞き取り調査により郭1、縦堀2の存在を予想できた。本城跡の北側は、安川の後背地が国重城跡を頂点として湾入する形で平坦地が広がり、水田として開けている。また東西両側は、小河川が「脱して安川に注ぎ、深い谷を形成している。

なお、発掘調査に際して第1郭から竪穴式住居跡2軒を確認した。

さて、本遺跡が所在する沼田町伴周辺の歴史を概観してみよう（第1図）。縄文時代から古墳時代にかけての沼田町伴周辺には見るべき遺跡はほとんどなく、わずかに、沼田町伴字細坂の細坂遺跡から磨製石斧が1点出土しているだけである。<sup>(注1)</sup> この点で、今回の発掘調査によって確認された竪穴式住居跡2軒は、今後この地域における遺跡発見例の増加を予想させるものである。

安川を下って安古市町に入ると、この時代の遺跡の数は若干増加する。従来から知られているものに鶏頭原貝塚<sup>(注2)</sup> 相田A・B・C遺跡<sup>(注2)</sup>、鶏頭原古墳<sup>(注2)</sup> などがある。しかし、近年毘沙門台遺跡、恵木遺跡の発掘調査が行われ、古代の様相が次第に明らかになりつつある。

古墳時代以後の沼田町伴周辺の様相をみってみる。7世紀中葉の大化改新により律令制が整元される中で、国郡制が行われるといわれるが、「和名類聚抄」に「安芸国佐伯郡土茂郷」の名が見え、沼田町伴に郷が置かれたことが想定される。また、中央と九州太宰府を結ぶ官道として大路といわれた旧山陽道の整備が行われ、駅制がしかれたことが「延喜式」に記されているが、「延喜式卷二一十八兵部省」の項に「伴部駅」と記されており、沼田町伴に比定される。現在沼田町伴には、「前原（馬家原の転訛と伝える。）」、「丁ようろ」等の古い地名が残っており、前述の「和名類聚抄」、「延喜式」の記述の傍証となるものであろう。これらのことから、伴周辺が大化以前からかなり開けた土地であったことをうかがわせるとともに、その地名から伴造との関係をも予想でき、伴造が管掌する伴部の亭在も考えられよう。

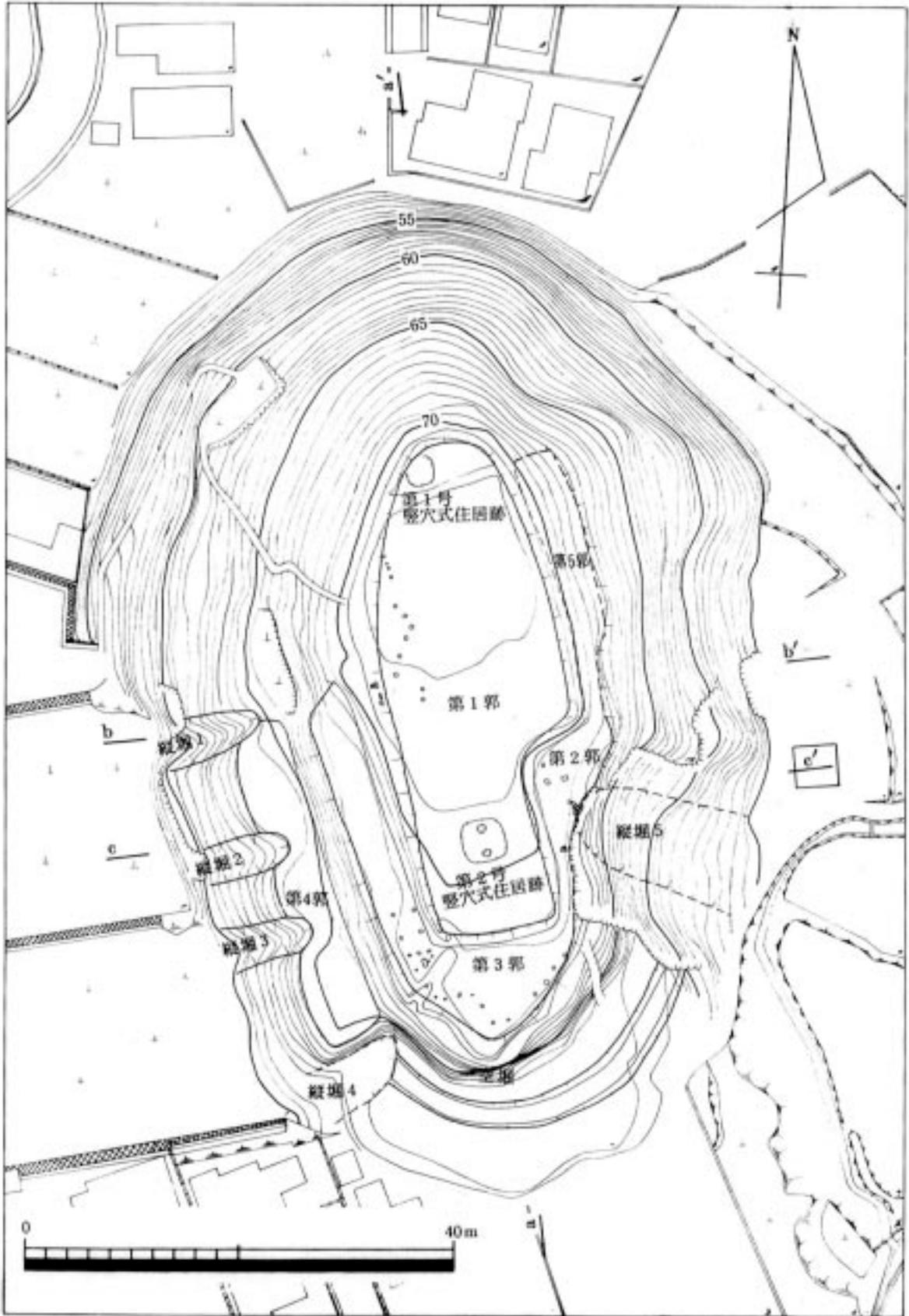
中世に入ると、承久の変（1221）以後多くの東国武士が、西国の守護・地頭として入部してくる。安芸国守護として甲斐国武田村に本領をもつ武田氏が守護職を補任されたのを初めとして、武蔵国熊谷郷の熊谷氏が三人荘に、相模国香川荘の香川氏が八木郷に、相模国毛利荘の毛利氏が吉田荘にそれぞれ地頭職を補任されるが、これら武士は、東国の本領にすでに地頭職をもっており、東国に存在していた。しかし、蒙古襲来を契機として、西国へ移住してくるようになり、その拠点に山城を築城し始める。

さらに室町時代に入ると、安芸国内の諸豪族は集合離散を繰り返し、武田氏・毛利氏が次第に勢力を持つようになる。一方周防の大内氏、出雲の尼子氏らも勢力を延ばし、14世紀後半以後、これらの勢力が安芸国の覇権を競うようになる。その結果、武田氏の勢力は弱まり、天文10年（1514）大内氏方についていた毛利氏によって滅ぼされるに至った。これ以後、広島湾一帯は毛利氏によって統一が進められる。こうした時代背景のもとで、広島市域だけでも約150力所の山城が築城されていく<sup>(注3)</sup>。本城跡もそのうちの一つである。

注1. 沼田町史 広島市市史編纂室編。昭和55年

注2. 全国遺跡地図（広島県）文化財保護委員会。昭和42年

注3. 広島市の文化財第20編「山城」広島市教育委員会。1982



第2図 国重城跡地形測量及び遺構配置図

### Ⅲ 遺 構

#### 1. 中世山城

本城跡の発掘調査により、4つの郭と3つの縦堀、1つの空堀が検出された。郭は最高所にある最大のものを第1郭、第1郭の東側にある小郭を第2郭、第1郭の西側から南側に配されているL字形の郭を第3郭、第3郭の西側にあり3つの縦堀を伴う郭を第4郭とした。縦堀は北側から順に1・2・3とよぶ。なお、地元の古老の話などから、第1郭の北東に、第2郭と連結して、郭のあったことが推測され、これを第5郭とした。また、第4郭の南側と第2郭の東側に縦堀のあったことも推測され、第4郭南側のものを縦堀4、第2郭東側のものを縦堀5とした。

##### 第 1 郭

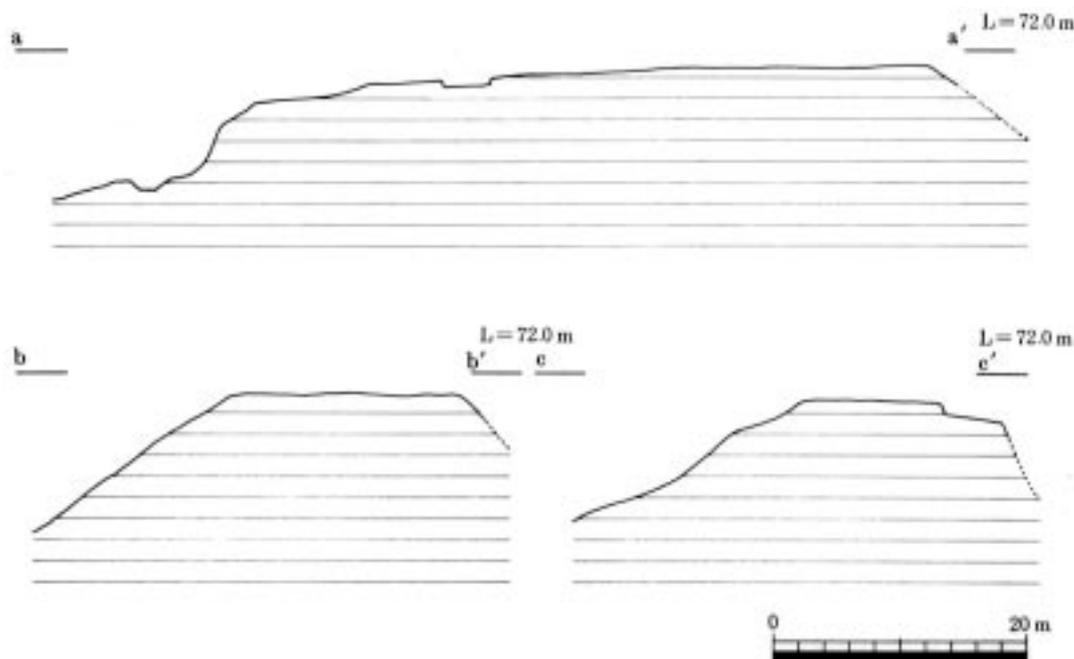
第1郭は標高71mを測り、木城跡の最高所を占め、長軸約45m、短軸11~17mを測る南北に長い、本城跡では最大の郭である。土層は30~40cmの表土がほぼ均一に堆積し、地山に至る。

この第1郭は、①かなり広大な郭であるにもかかわらず、地山面がほぼ平坦であること。②後述する第1郭北西の柵列と考えられる遺構の柱穴が、深さ30~60cmを測りかなり深いことから、地山面が1つの使用平坦面として存在していたことを推測させること。などの特徴及び他の山城の例からみて、地山整形によって築成されたものと考えられる。

なお、第1郭からは柱穴列、石段状遺構、竪穴式住居跡2軒が検出され、土師質土器及び鉄製品等が出土した。

##### 柱穴列 1 (第4図)

第1郭北西から検出された12個のピットであり、南から北へ向けてP1~P12とした。これらのうち、P1~P2は径30~40cm、深さ40cm前後、ピットの間隔0.9m、P3~P8は径30~40



第3図 国重城跡断面実測図

cm, 深さ40~60m, ピットの間隔1.6~2.1m, P9~P12は径20cm前後, 深さ30~40cm, ピットの間隔0.5~0.9mを測る。各ピットの置関係は, 第4図に示すとおりであるが, 建物の存在を示唆するような規則性は認められず, 木柵などの施設を構築するための柱穴として利用されたものと考えられる。

### 石段状遺構

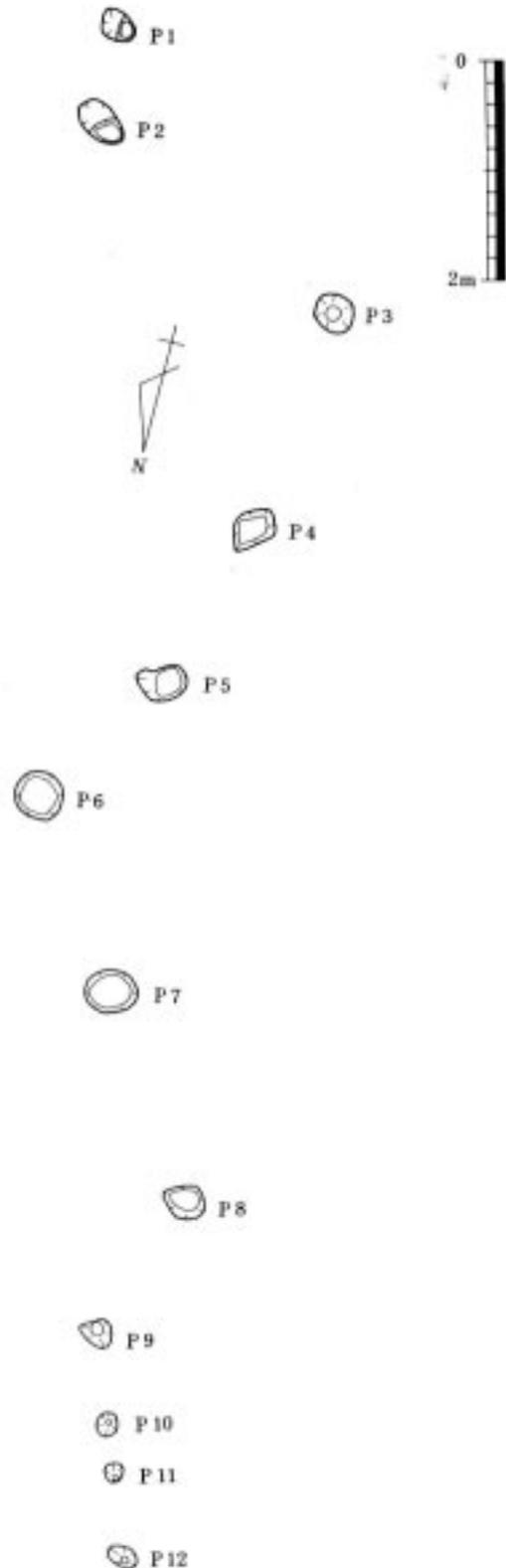
第1郭西側のほぼ中央から検出された全長約3.5mの石段状の遺構である。使用されている石材は, 長さ30~80cm, 幅30cm前後, 厚さ約15cmのものであり, これを階段状に3段にわたって積み上げている。しかしこの遺構は, 城の築城時のものと考えられる地山整形面から約70cm上方にあるため, 山城に伴う施設と考えるのは困難である。

なお, 石段状遺構直下の地山に, 幅50cm程度の平坦面がみられ, これは南北に延びる傾向を示していることから, 第1郭と第3郭を結ぶ連結路とも考えられよう。

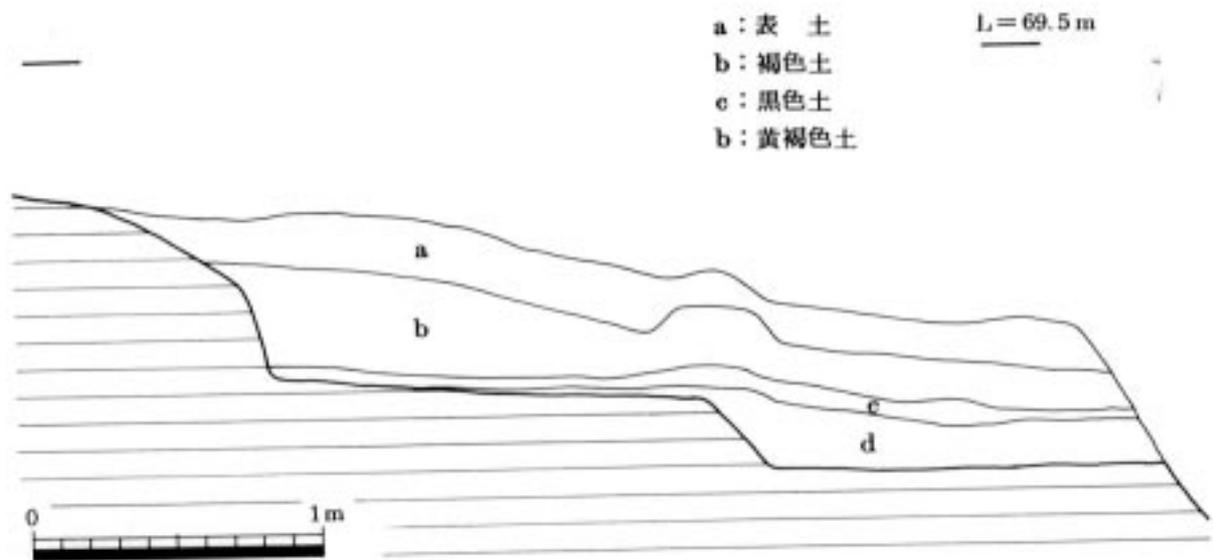
### 第2郭

第1郭の東側に配された郭であり, 第1郭との比高差は約1.2mを測る。土砂崩れ・土取りなどのため, 郭の一部が崩壊しており, 現状では三角形を呈している。現存する規模としては, 南北約12m, 東西は最大部で約7mを測る。この第2郭は北では第5郭, 南では第3郭と連結している。

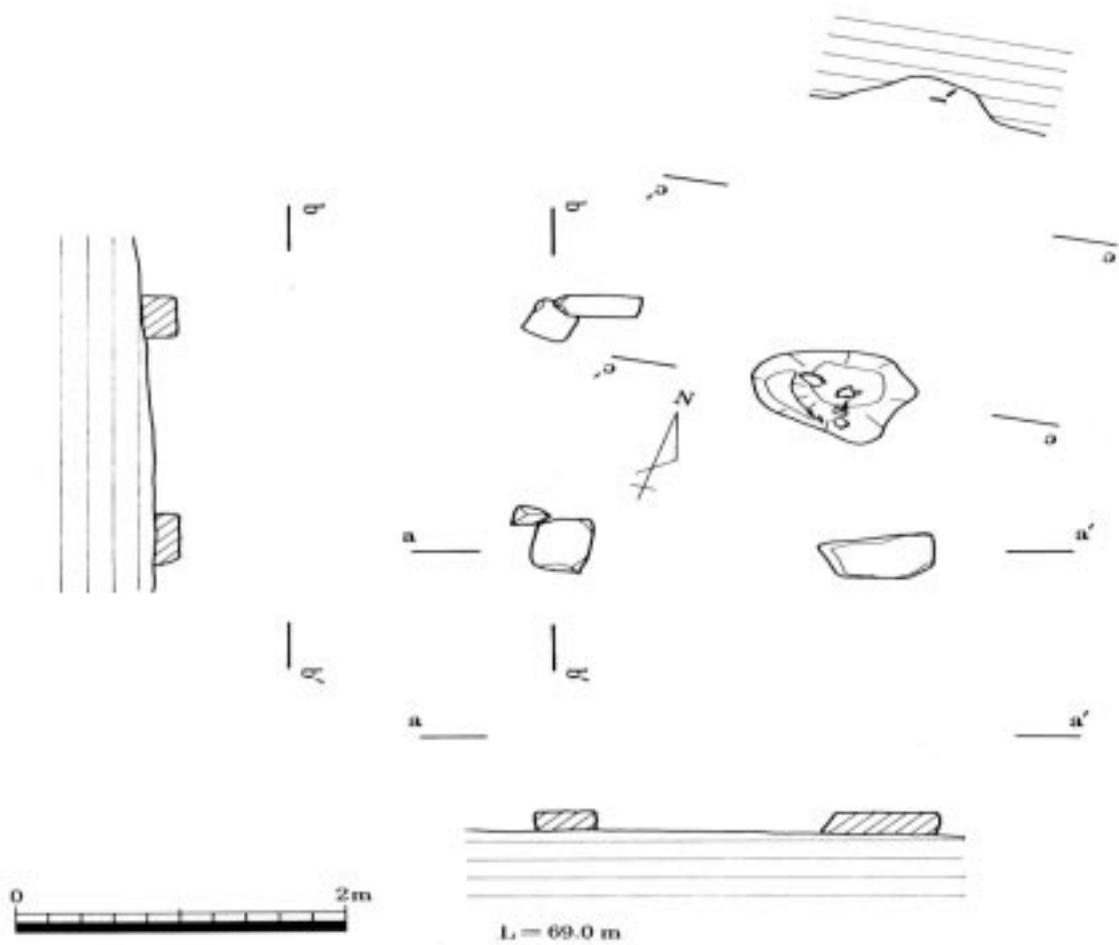
第2郭は基本的には, 第1郭の一部をL字形に掘り下げることによって築成したものである。しかし, 第2郭における土層観察によると, 上から約20cmの表土層, さらに15~35cmの褐色土層, 5に遺



第4図 第1郭柱穴列実測図



第5图 第2郭断面实测图



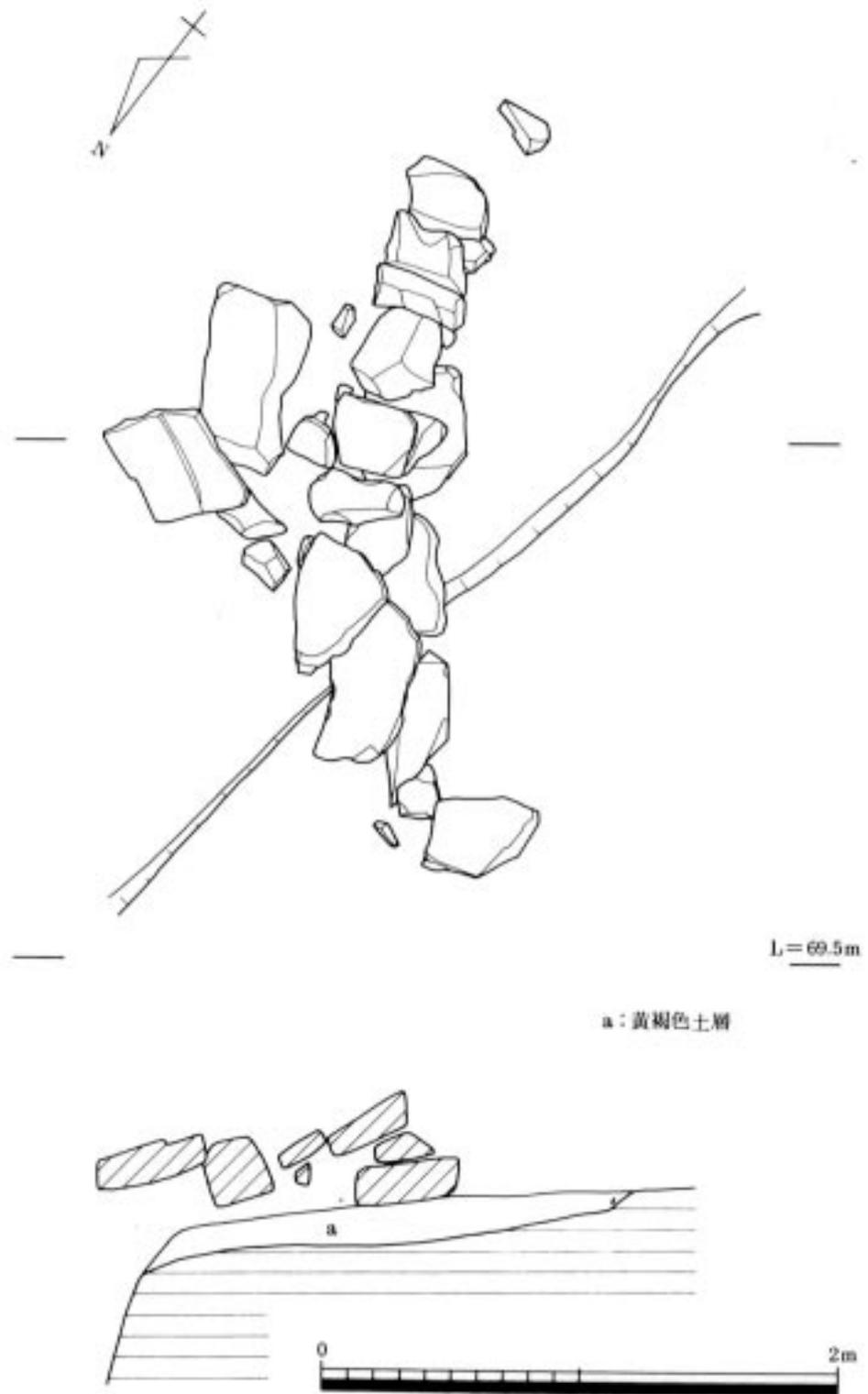
第6图 第2郭礎石实测图

物が出土しており、他の土層からの遺物の出土はみられない。このことから、東側部分は盛土による整形が行なわれたことが考えられる。(第5図)

第2郭からは礎石、石垣状遺構、コの字型配石遺構が検出され、陶磁器と鉄製品が出土した。なお縦堀5は、崖面のため調査不能であり、規模の確認はできなかった。

**礎石 (第6図)**

第2郭のほぼ中央から検出された3個の板石列である。板石列は、長さ32~70cm、幅29~34cm、厚さ15~22cmを測る。これらの板石は、①いずれも地山に接していること。②石上面が平らであり、レベルがほぼ一致すること。③板石間の間隔が2m前後を保持していること。などの特徴がみられることから、4本柱で構成される1間×1間ないしはそれ以上の建物の礎石と考えられる。この場合、建物の北東部分にあるべき礎石は何らかの事



第7図 第2郭石垣状遺構実測図

情で失われたものであろう。なお、建物の桁（梁間）方向はN18° Wを示している。また、すでに述べたように黒色土層には多量の炭化物が含まれており、礎石の上面はこの黒色土層中にある。このことから礎石上に構築された建物は、火災を受けたことが考えられる。

### 石垣状遺構（第7図）

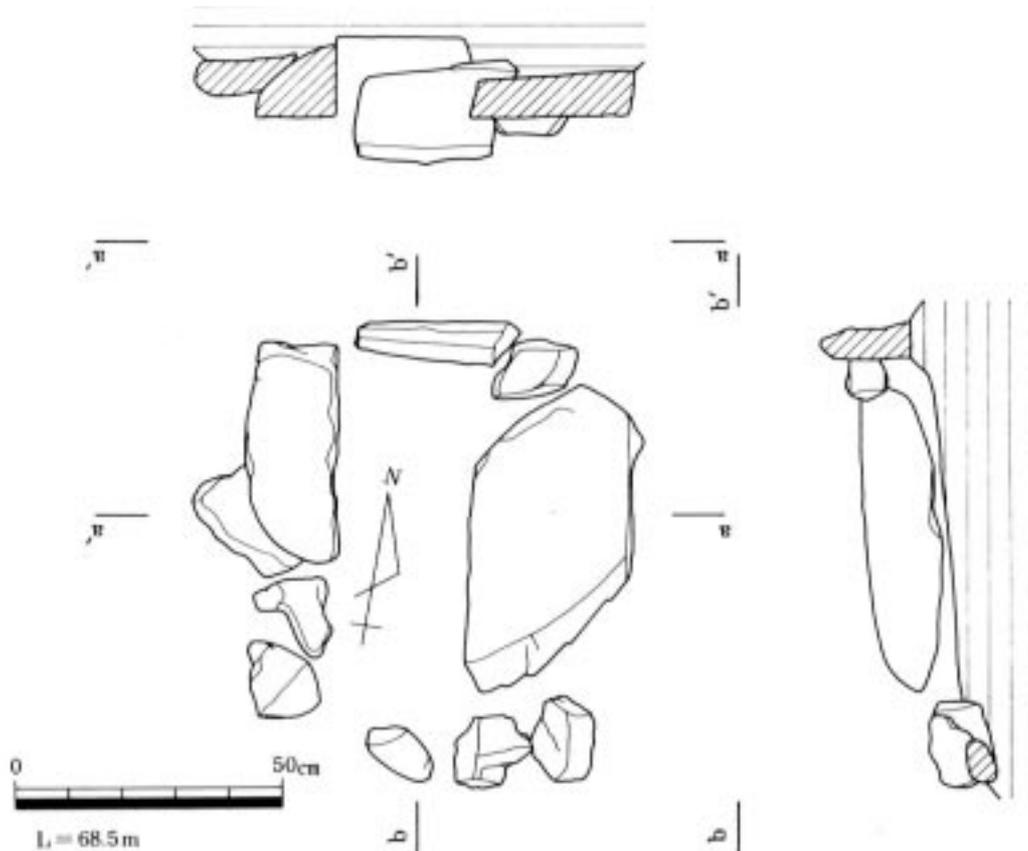
第2郭東側の崖面（縦堀5）直上から検出されたものであり、その位置及び形状から石垣と考えられる。石垣の規模は、全長約2.5m、幅約60cm、高さ約45cmである。石材の大きさは、長さ20~60cm、幅30cm前後のもので、それを3段にわたって積み上げている。もっとも、最上段の石材は東側に向かって崩れ落ち、それは崖下にもみられる。また北端の石材も西方向に動かされている。

なお、石垣の北側基底部において黒色土層が認められることから、石垣の築成は、すでに述べた礎石建物の焼失よりやや下る時期に行われたものであることがわかる。

### コの字型配石遺構（第8図）

第2郭の石垣状遺構の南西側3mほどの場所に位置するこの遺構は、主軸をN10° Eに向けており、規模は現状で長さ70cm、幅は北側29cm、南側27cm、高さ24cmを測るもので、その形状から当初、箱式石棺と予想していたものである。

しかしながら、石棺の側壁と思われる石積みは、石棺としては定形をなさず、また、蓋石も余く欠失していること、掘り方も明瞭でないこと、遺物が全く見られないことなどから石棺以外の用途も考えられ、なお、検討の余地がある。



第8図 第2郭コの字型配石遺構実測図

### 第 3 郭

第1郭の西側から南側にかけて配されたL字形の郭である。西側は、東西方向約4m、南北方向約30mを測る南北に細長いプランを呈し、南側は、東西方向約14m、南北方向は最大で8mを測る三角形のプランを呈している。第1郭との比高差は西側で約2m、南側で約1.2mを測る。

この第3郭の築成は、南半分においては、基本的には地山を平坦に整形することによって行なわれたものである。それは後述する柵列と考えられる遺構の柱穴が、平均して深さ46cmを測り、かなり深いことからもうかがえる。しかし北半分においては地山は自然地形の傾斜面となり、落ち込んでいるので盛土による整形が行なわれたことが考えられる。

#### 柱穴列2（第9図）

第3郭の南半分から検出されたピット群であり、東から西に向けてP1～P29とした。このうち、柱穴と考えられるのは20か所である。

P2～P5は、径30～40cm、深さ70cm前後を測る大きな柱穴である。これらはほぼ一直線上に並び、柱穴間の間隔も1.6m前後を保持していることから、柵列などの防御施設が設けられていたものと考えられる。P6～P17は、径20～40cm、深さ25～55cmを測り、大きさは一定していないが、掘立柱を立てるのには十分な大きさである。柱穴の位置関係は、第9図に示すとおりであり、柵を連結させるための柱穴として利用された可能性が強い。P22～P25の4つの柱穴は方形に並んでおり、径30～50cm、深さ30～60cmを測る。柱穴間の間隔は、南北方向約2.5m、東西方向約2mを測る。またP24からは掘立柱を固定させるのに用いたと思われる角礫が2個検出されている。したがって、1間×1間以上の掘立柱系の建物が想定されるが、位置などからみて柵列の可能性もある。

### 第 4 郭

第3郭の西側に配された南北に細長い郭であり、全長約30m、幅3～6mを測る。第1郭との比高差は約6m、第3郭とは約4mを測る。第4郭の築成は、地山が西側に向かって急傾斜で落ちていることから、盛土による整形が行なわれたものと考えられる。第4郭は、縦堀2・3によって小郭に細分されており、さらに縦堀1・4によって南北をはさまれている。縦堀1・2・3はほとんど同じ規模のものであり、断面は薬研状を呈し、上部幅は1.5～2mを測る（第10図）。

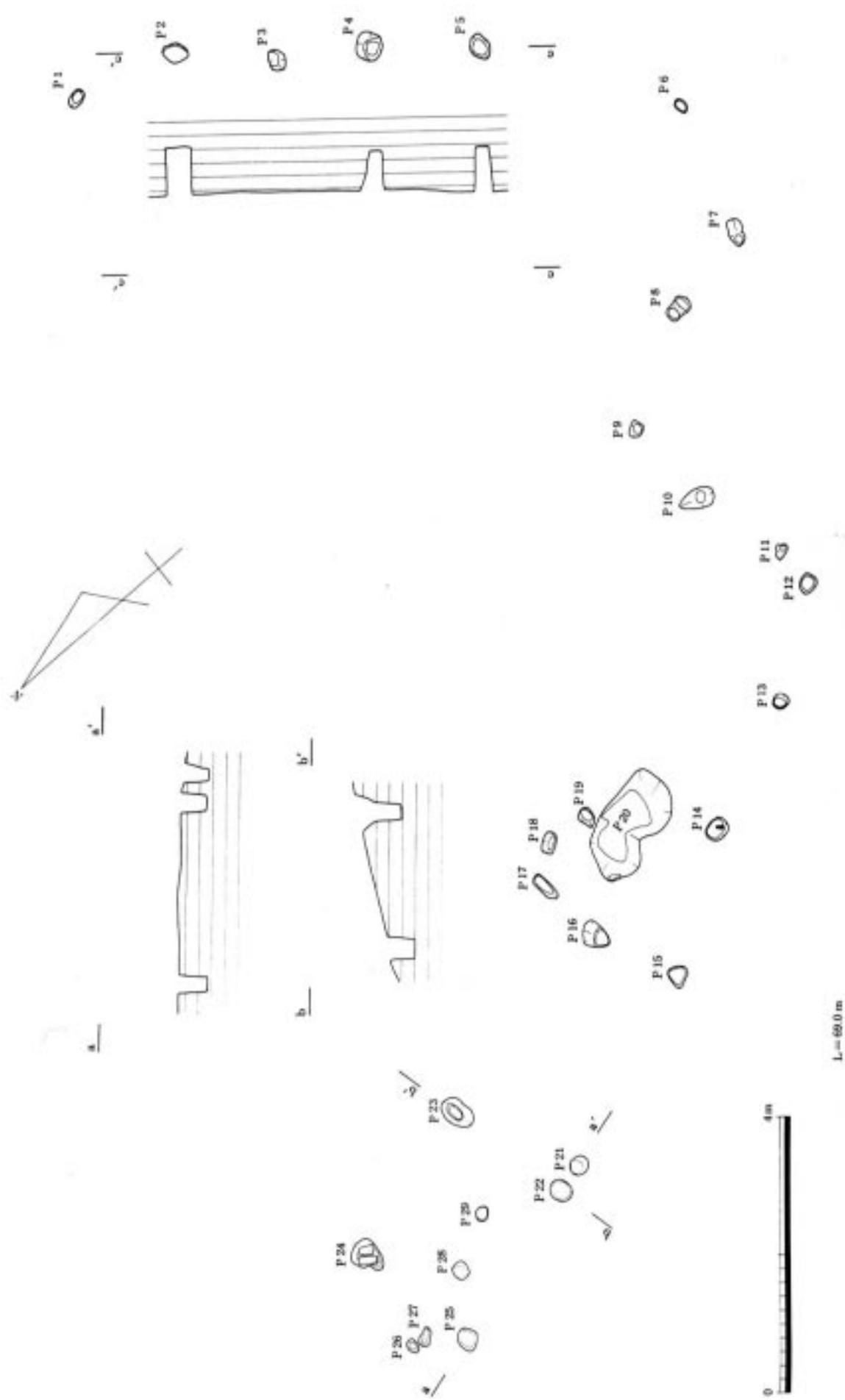
なお縦堀4は、土砂の崩壊のため調査不能であり、規模の確認はできなかった。

### 第 5 郭

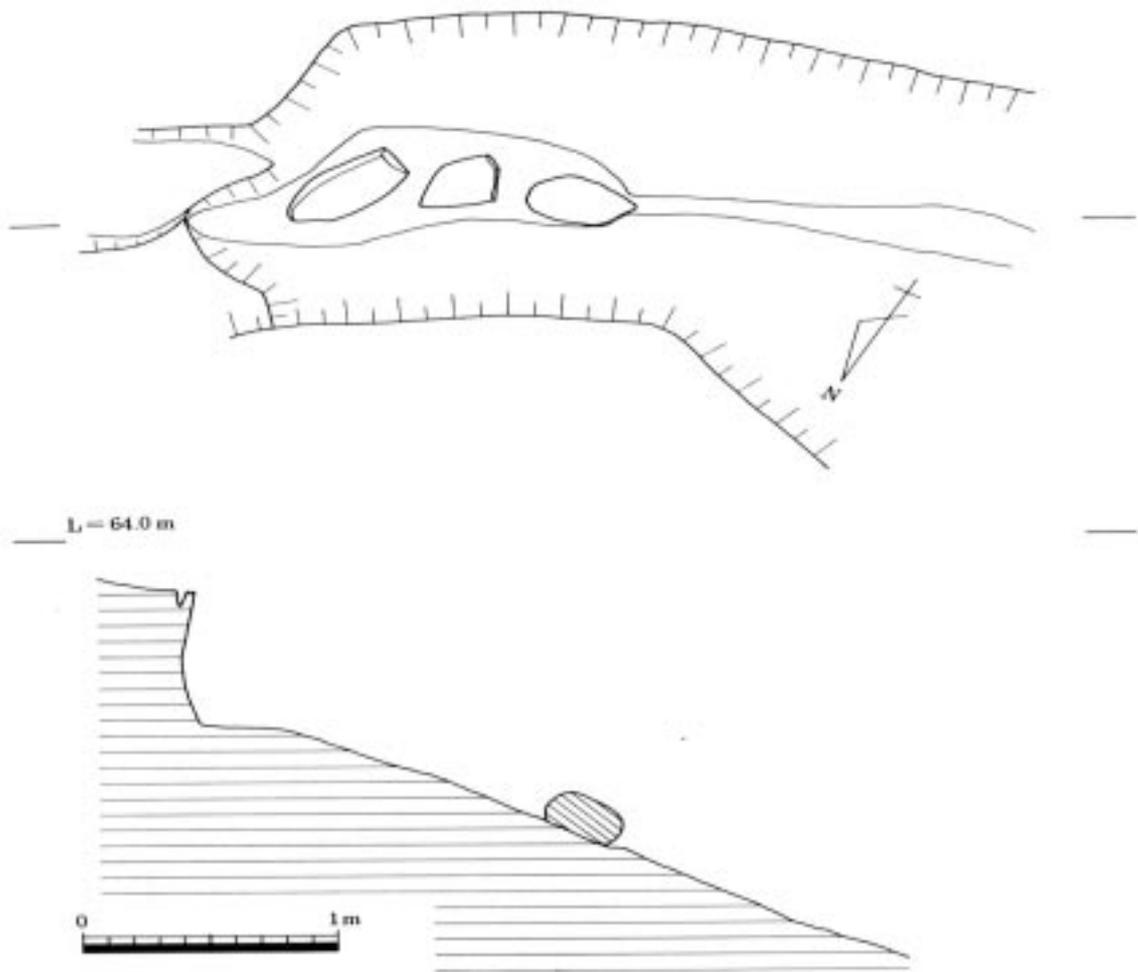
第5郭は、すでに地形の変更が著しく調査による確認はできなかったが推定規模として、南北20m、東西4m程度の郭が考えられる。

#### 空堀（第11図）

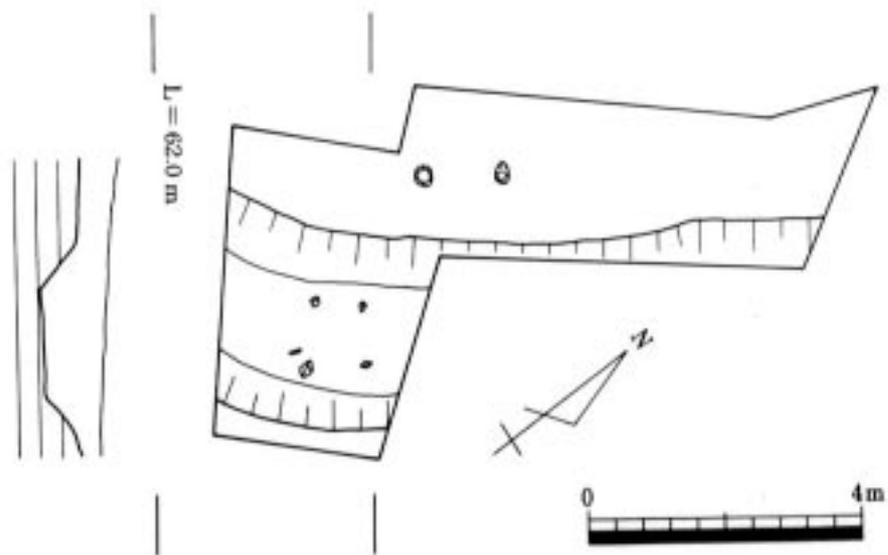
本城跡南側の平坦部で、当初、郭とみられていた地点から空堀が検出された。この空堀は、本城跡の南側を囲むように湾曲して設けられており、西は縦堀4、東は縦堀5に連なると推測される。断面は箱薬研状を呈し、底部幅約1.8m、現表面にわかる上部幅3.5m、第3郭からの深さ約7mを測る。しかしこの地点は、後世かなり削平されているので、築成時の規模はもっと大きかったものと考えられる。なお、空堀底部からは陶器片が出土している。



第9圖 第3都柱穴列支圖



第 10 図 縦堀 2 実測図



第 11 図 空堀実測図

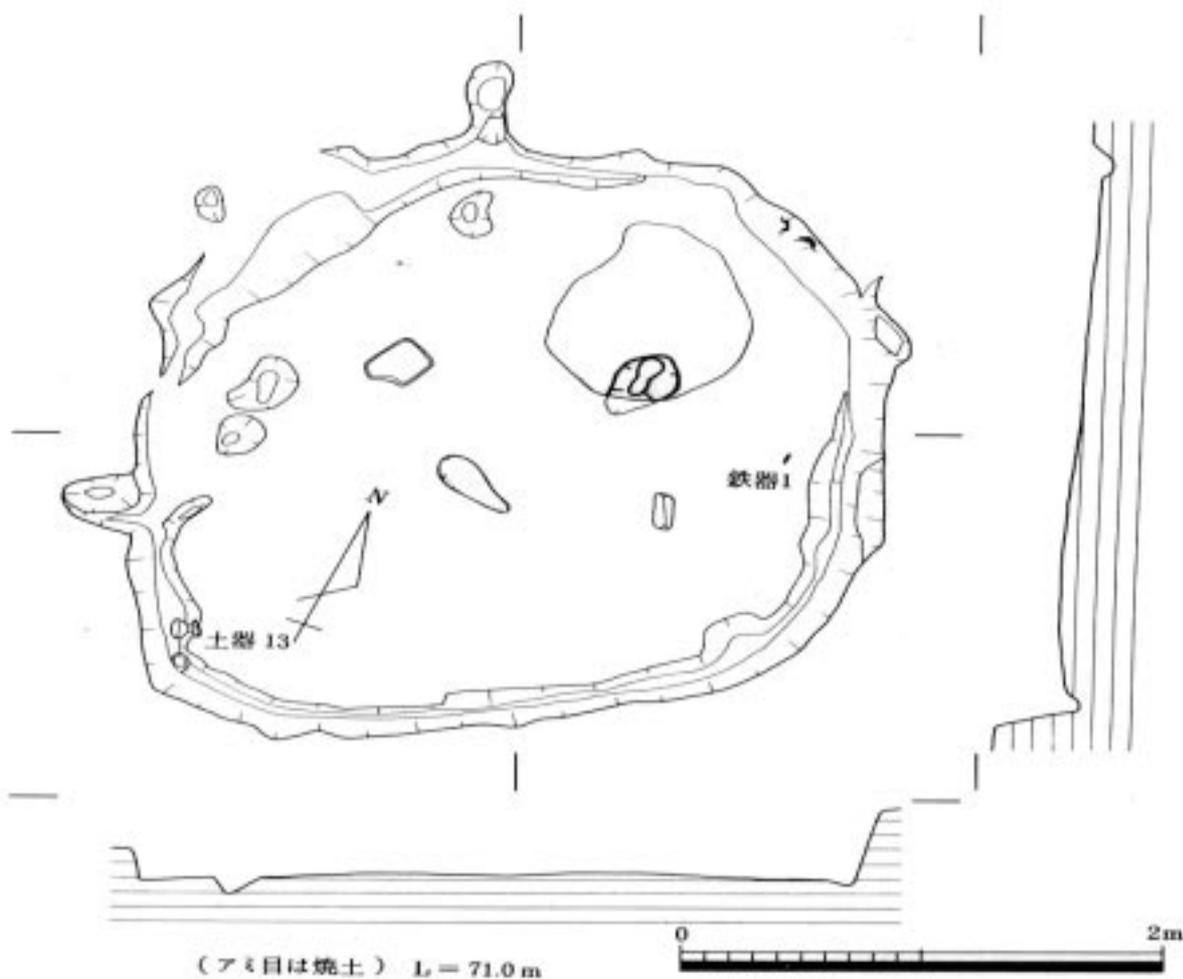
## 2. 竪穴式住居跡

すでに述べたように、国重城跡では第1郭より2軒の竪穴式住居跡が検出された。北側の住居跡を第1号住居跡、南側の住居跡を第2号住居跡とした。

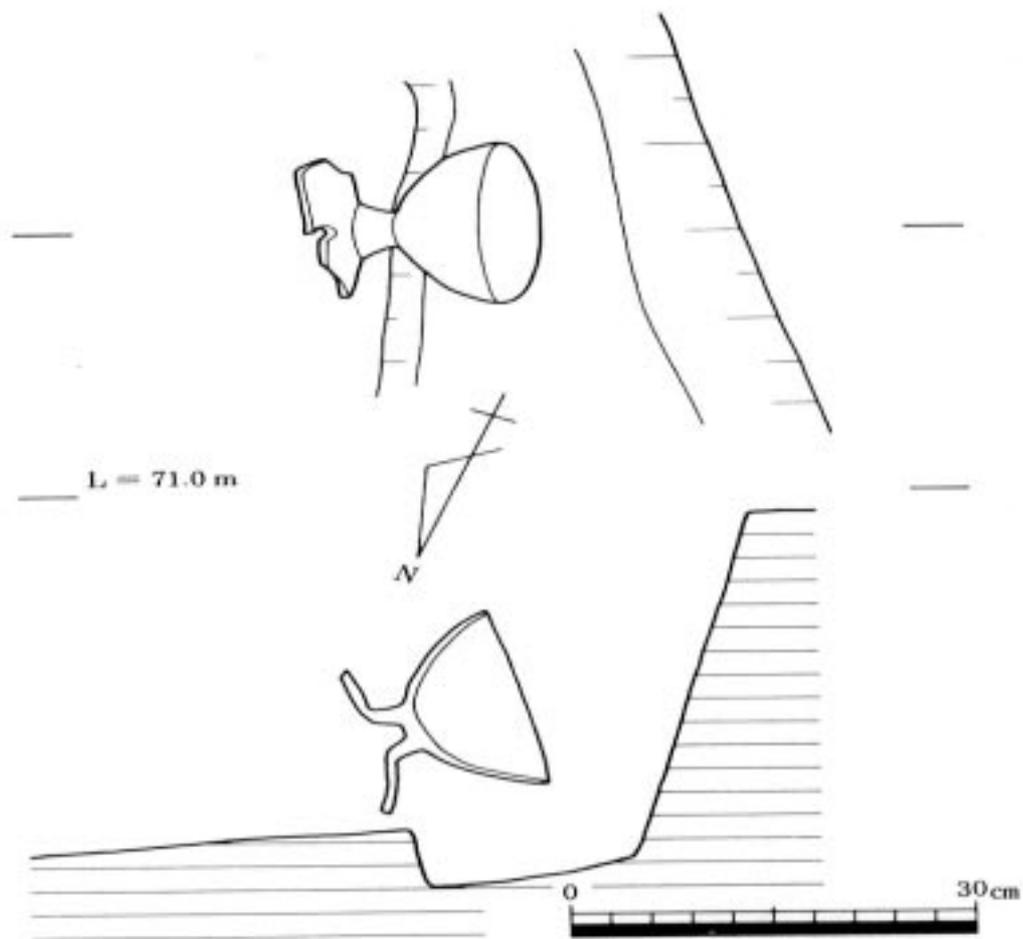
### 第1号住居跡 (第12図)

第1郭の北側、尾根頂部に近い緩傾斜にあるこの住居跡は、地山を南北に3.15m、東西に3.10m掘り込み、隅丸方形に近い平面プランを有するものである。壁の高さは、緩斜面に位置しているため一様ではなく、最大壁高38cmを測り、北西側の掘り方は見られない。また、床面も約15cmの落差をもって北に向かって傾斜しており、壁溝は南寄りでは顕著であるが、北寄りでははっきりしない。さらに、焼土が床面のやや北よりから検出され、範囲は80×100cm程度で不整形をなしていた。

住居跡内外からは、径20~40cm、深さ10~30cmほどの小ピットを5か所検出したが、それらの規模、位置からみていずれも柱穴とは考えにくい。



第12図 第1号竪穴式住居跡実測図



第13図 高坏出土状態実測図

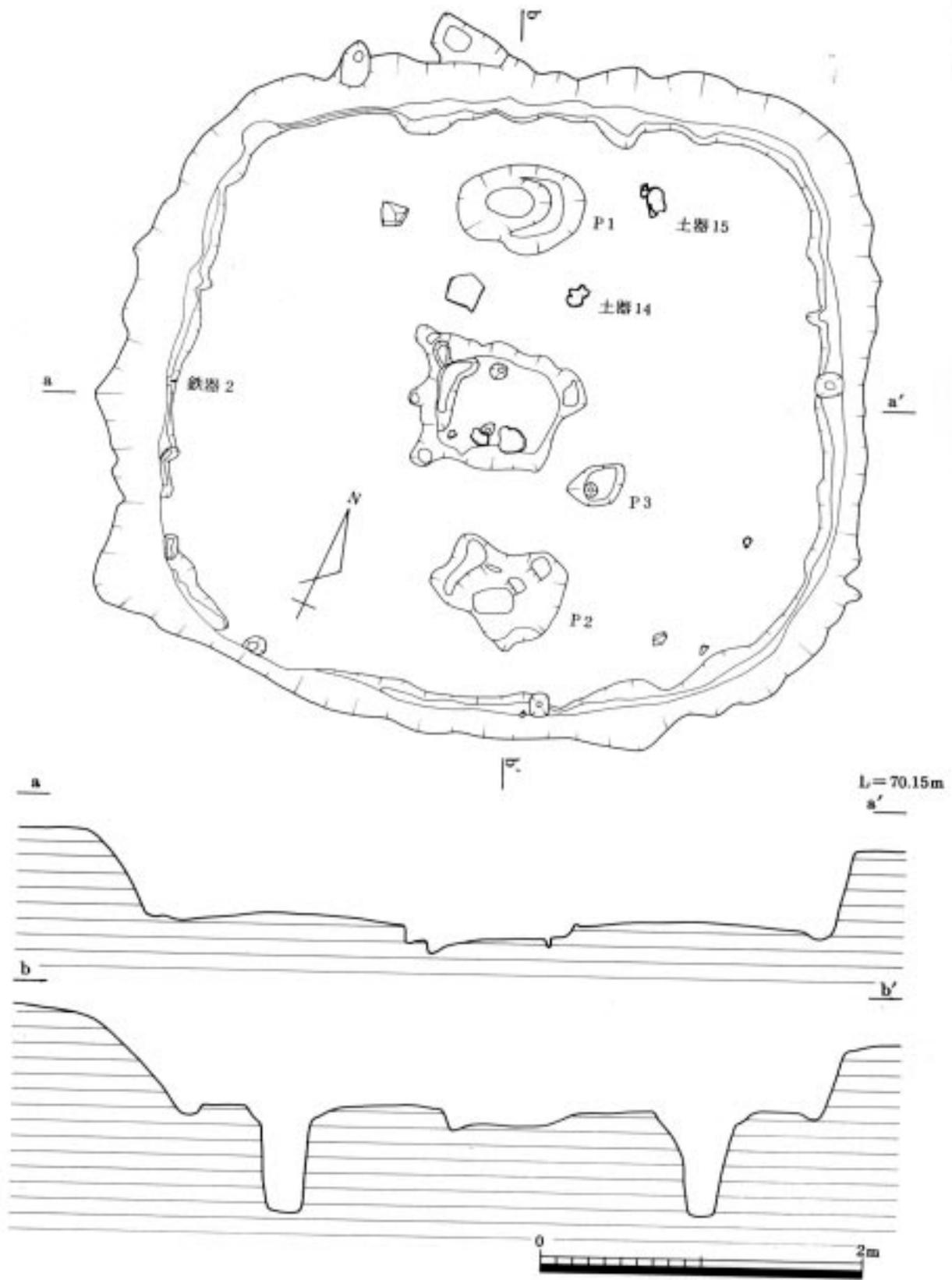
住居跡に伴う遺物はきわめて少なく、南西隅に近い壁溝の直上から高坏1個体、東側壁溝に近い場所から鉄片が1点検出されたのみである。

### 第2号住居跡 (第14図)

第1郭の南側、第1号住居跡の南方35mの場所にあるこの住居跡は、地山を南北に4.40m、東西に4.75m掘り込み、壁高は北西部60cm、南東部45cmを測る。平面プランは隅丸方形を呈している。住居跡の中央部には、80~90cmほどの不整形の焼土が検出され、焼土の下には焼土とほぼ同じ範囲で掘り込みが見られたが、これは炉跡と考えられる。また、住居跡には南寄りの一部分を除き壁溝がめぐらされ、その深さは5~10cmほどであった。

住居跡内からは、ピットが3か所検出された。この内、P1・P2は径30~40cm、深さは約70cmを測り、ピットの規模・位置などから考慮して柱穴と判断したが、P3は、大きさ・深さ・位置などの条件を考え合わせてみて柱穴とは考えられない。

住居跡に伴う遺物は、若干量の土器を出土したが、小片が多く器形を推定できるものは住居跡内北寄りの床面上から出土した2個体のみであった。また、炉跡内より土器片が数片検出されたが、器形を判断するには至らなかった。なお、西壁溝より鉄片が1点検出された。



第14図 第2号竪穴式住居跡実測図

# IV 遺 物

## 1. 中世山城

土師質土器は、第1郭の北側から出土したものである。器種はすべて糸切り底の皿であり、そのいずれにも黒色の油滓と考えられる異物が付着していることから、灯明皿としての用途が考えられる。出土数はわずか7点にすぎないが、形態及び製作手法の特徴などから3類に細分することが可能である（表1参照）。

### A類（第15図1～5）

A類は口径12.3cm、底径5.8cm、器高3.4cm程度で、口径に対する器高の割合が3.6前後を示す一定の規格を有するものである。土器1～4がこれに属する。器壁は、底部からいったん外湾しながら外上方に大きく開くが、口縁に近い部分ではやや内湾気味に処理されるという形態的特徴をもっている。5は1～4に比してひと回り大きく、器高はやや低いという異なった規格を示すものの、前述の形態的特徴を具備しているので、A類ないしはその亜種と考えることができる。いずれも器体の内外両全体に水引き調整を施し、色調は赤褐色を呈し、胎土も良く精選されたものを用いている。

### B類（第15図6）

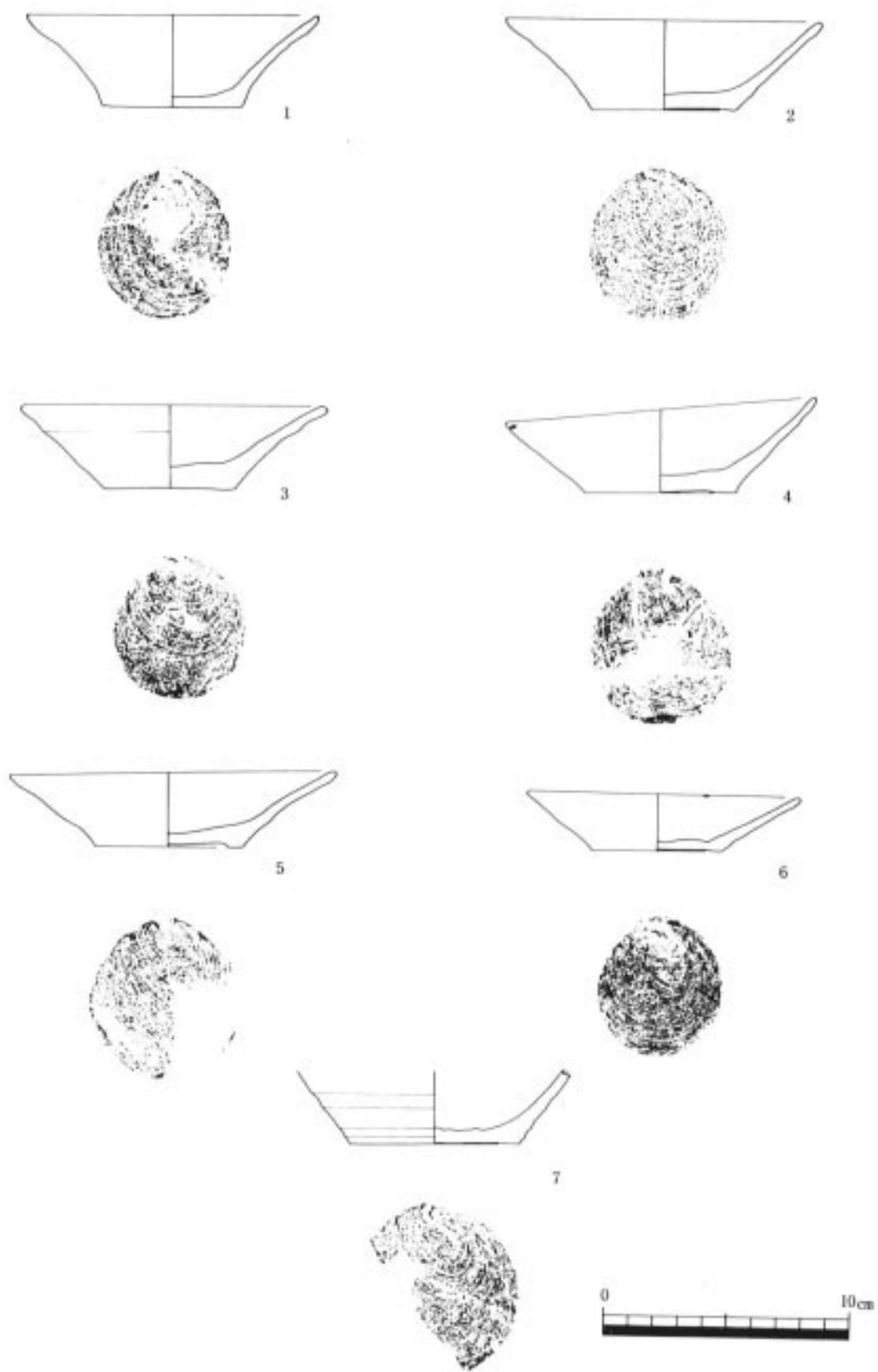
B類に属する土器は6のみである。6は口径10.9cm、底径5.3cm、器高2.2cmを測る。口径に対する器高の割合は4.95を示し、A類に比して底の浅い土器である。器壁はやや内湾しながら外上方に大きく開くという形態的特徴をもっている。器体の円外面全体にいていねいな水引き調整が施され、色調は淡褐色を呈し、胎土はきわめて良く精選されたものを用いている。

### C類（第15図7）

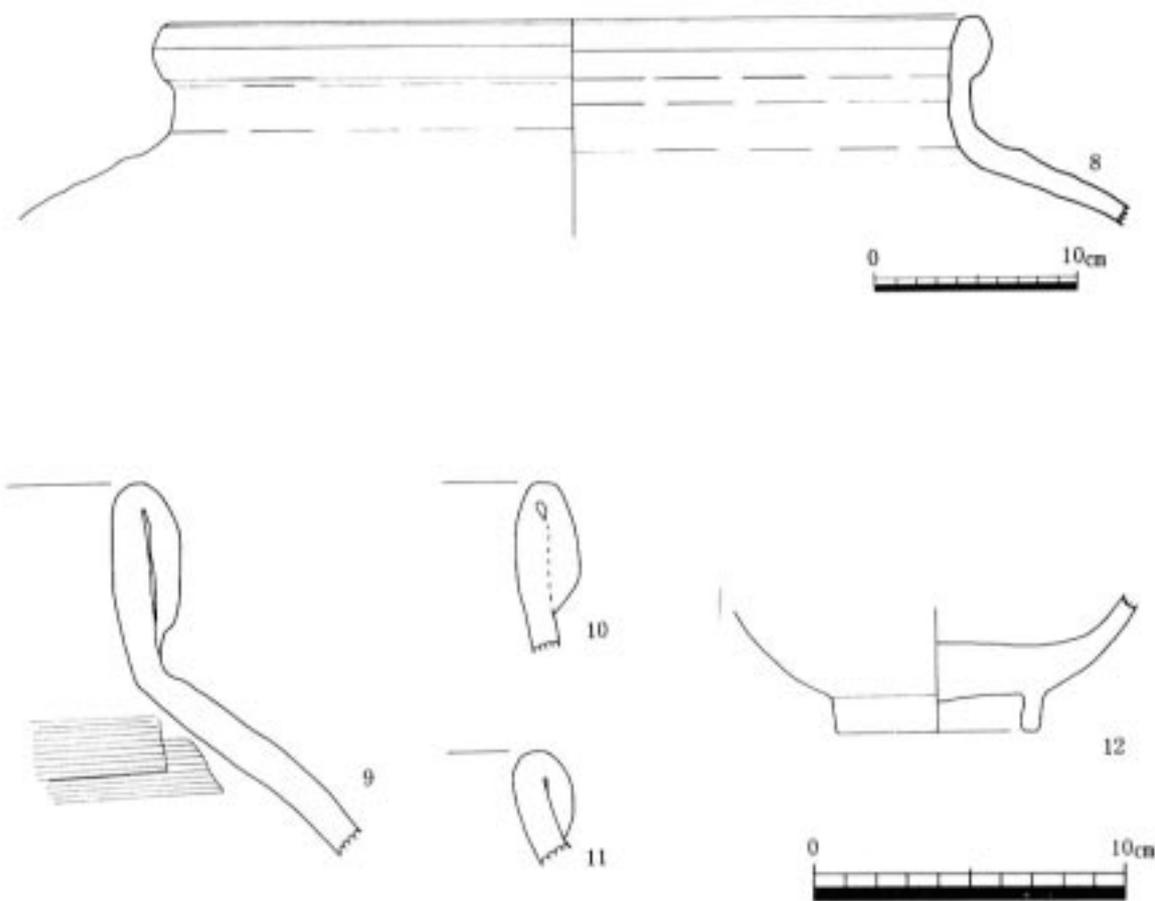
C類に属する土器は7のみである。口縁部を欠失しているため、口径・器高とも不明であるが、底径は出土した7点のうち最大の6.8cmを測る。器体の内外面全体に水引き調整が施されているものの、底部外面にロクロ目を顕著に残しているという製作手法上の特徴を有する。色調は暗褐色を呈し、胎土はやや荒く石英の砂粒を含んでいる。

表1 土師質土器一覧表

分類	土器番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径器高	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成
A	1	11.8	5.5	3.6	3.28	○器壁は、底部からいったん外湾しながら、外上方に大きく開くが、口縁に近い部分ではやや内湾気味に処理する。 ○底部は平坦で、器肉は少し厚くなる。	○器体の内外面全体に、水引き調整を施す。 ○底部は糸切り底である。	赤褐色	精良	やや軟調
	2	12.7	5.8	3.5	3.63					
	3	12.1	5.3	3.3	3.67					
	4	12.5	6.1	3.3	3.79					
	5	13.2	6.0	2.9	4.55					
B	6	10.9	5.3	2.2	4.95	○器壁は、やや内湾しながら、外上方に大きく開く。 ○底部は平坦で、器肉は少し厚くなる。	○器体の内外面全体に、ていねいな水引き調整を施す。 ○底部は糸切り底である。	淡褐色	きわめて良	
C	7	—	6.8	—	—	○器壁は、外上方に開くが、口縁部を欠くため、全体的な形態は把握できない。 ○底部は平坦である。	○器体の内外面全体に、水引き調整を施すが、底部外面に、ロクロ目を顕著に残す。 ○底部は糸切り底である。	暗褐色	石み英、砂や粒やを荒含	



第 1 5 土師質土器実測図



第16図 陶磁器実測図

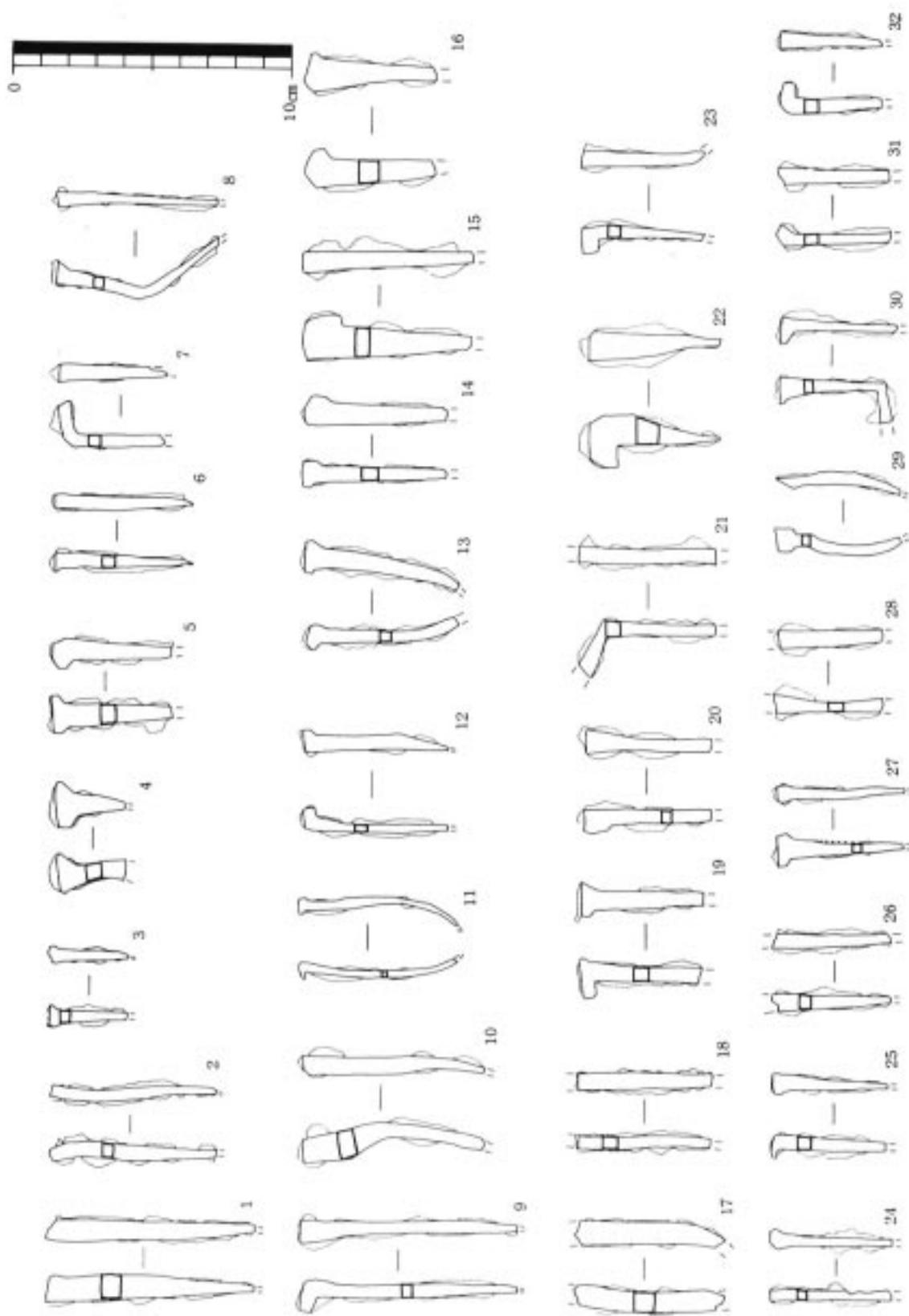
### 陶器（第16図8～11）

陶器としては、備前焼と考えられる甕の破片が、第2郭、第3郭及び空堀から出土したが、実測可能なものは4点のみである。これらの口縁は折り返し口縁であり、玉縁を呈している。

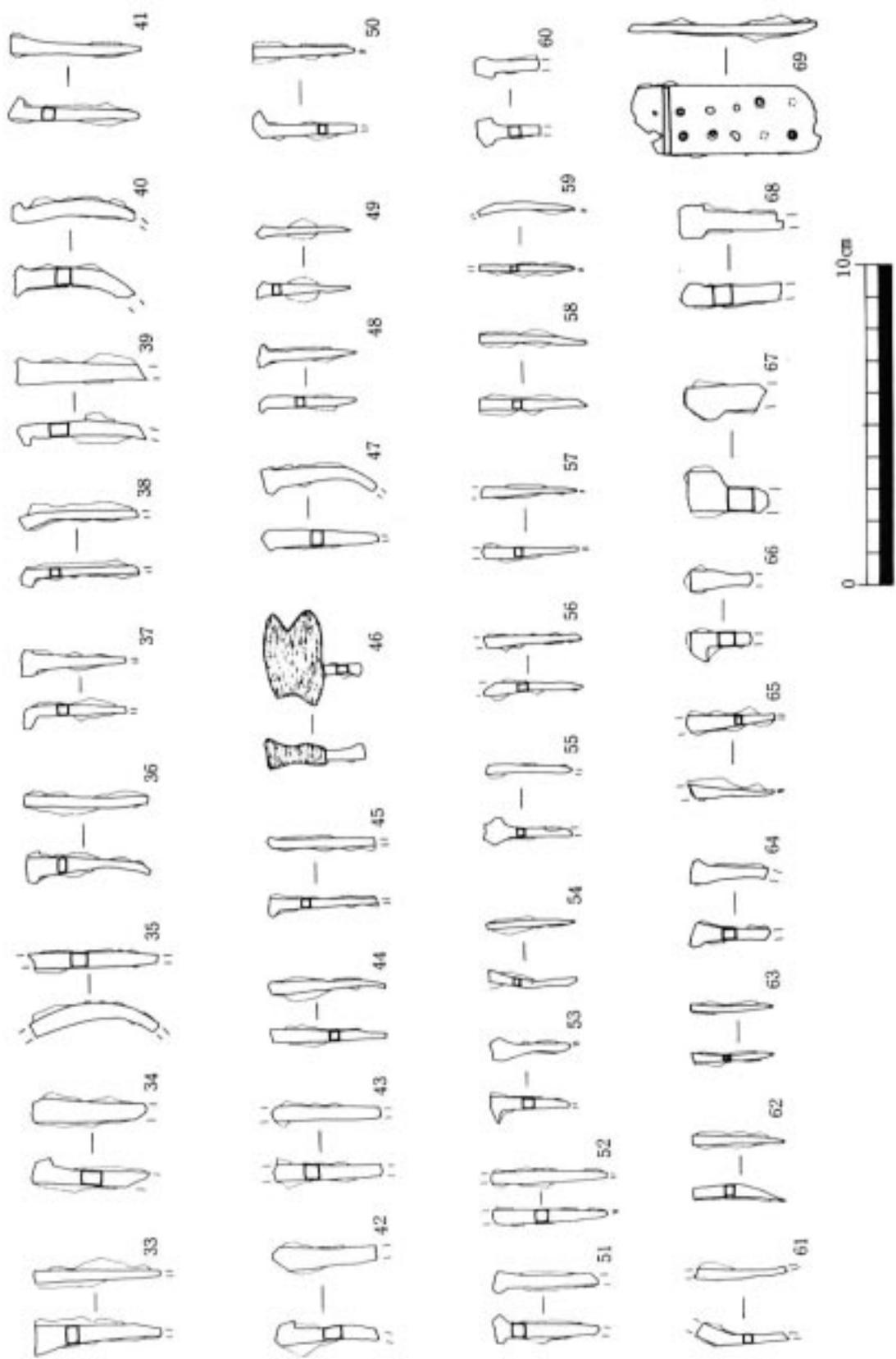
なお、第2郭の黒色土層から古瀬戸と考えられる若干の破片が出土した。しかしこれらは小片のため図示するに至らず、その形態・器種などは不明である。

8は、第3郭の西側から出土した口縁部から胴部にかけての破片である。口径は40cmを測り、口縁部は直立し、長さ2.9cm、幅2.0cmの玉縁を呈す。内外面とも水引き調整が施されている。色調は門外とも灰赤縄色であり、胎土は長石の砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。9は、空堀から出土した口縁部から頸部にかけての破片である。口縁は長さ4.4cm、幅2.0cmの扁平な玉縁を呈す。内外面とも水引き調整が施されているが、頸部の内面にはヘラ削りの痕跡が残されている。色調は内面は暗赤褐色、外面は暗灰色である。また、口縁部の内面から外面全体にわたり自然釉がかかっており、白斑が認められる。胎土は長石の砂粒を多く含み、焼成はきわめて堅緻である。

10は、第2郭の黒色土層から出土した口縁部のみの破片であり、長さ3.9cm、幅2.0cmの扁平な玉縁を呈す。内外面とも水引き調整が施されている。色調は内外とも灰色であり、胎土は長石の砂粒を含み、焼成は良好である。



第 17 图 国重城跡出土鉄釘実測図



第 18 图 国重城跡出土鉄製品実測図

11は、第3郭の西側から出土した口縁部のみの破片であり、長さ2.6cm、幅1.8cmの玉縁を呈す、内外面とも水引き調整が施されている同色調は内面赤灰色、外面暗灰色であり、胎土は長石の砂粒を含み、焼成は堅緻である。

### 青磁碗（第16図12）

第2郭の黒色土層から出土した底部から胴部にかけての破片である。底径6.4cm、器内は底部で1.7cmを測る。高台の内側を除いて、0.5mmの厚い青釉がかかっており、胎土は白色で精良である。底部内面に直径約7.5cmの円形の区画があり、その中に曲線文が描かれているが、その全容は不明である。製作技法などからみて、中国からの輸入磁器の可能性はある。

### 鉄製品

#### a 鉄釘（第17・18図）

全体で100本程度出土したが、図示しうるものは68本である。そのうち第1郭から出土したものは8本（1～8）にすぎず、他はすべて第2郭の黒色土層から出土した。先端を欠失しているものが多く、ほぼ完形を呈しているものは、わずか17本を数えるのみである。

この17本は、まず釘の長さで2分し、さらにそれを断面の面積で2分すると、

①長さ5.0～7.8cm、断面の面積56～64mm<sup>2</sup>を測るもの。（1, 22）

②長さ5.0～7.8cm、断面の面積4～20mm<sup>2</sup>を測るもの。（6, 9, 11, 12）

③長さ2.6～4.5cm、断面の面積12～18mm<sup>2</sup>を測るもの。（27, 29, 33, 36, 41, 62）

④長さ2.6～4.5cm、断面の面積4～9mm<sup>2</sup>を測るもの。（44, 48, 49, 58, 63）の4種類に分けることができる。

釘の断面形は、正方形を呈するものと、長方形を呈するものがあるが、④は正方形を呈するものが多い。釘頭の形は、端部を折り曲げた折頭形を呈しているものが多いが、釘頭の認められないものもみられた。なお、木質が遺存しているものが1本（46）あり、第2郭の礎石建物に用いられたものと推測される。

#### b 小札状鉄製品（第18図69）

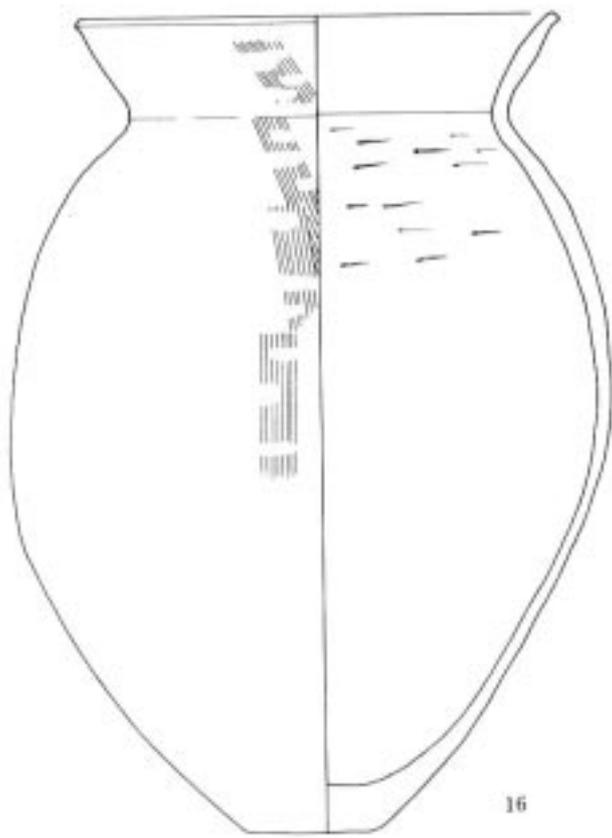
第2郭から出土した長さ5.8cm、幅2.2cm、厚さ0.2～0.4cmを測る鉄製品である。この鉄製品には、径2mm前後の穿孔が9個認められたが、錆の状態などからみて、本来7～9mmの間隔をもつ6個の孔を8～10mm間隔で2列に穿けていたものと推測される。この鉄製品は、形態及び孔の配置などから、甲冑の小札と考えられる。

#### c 鉄蓋

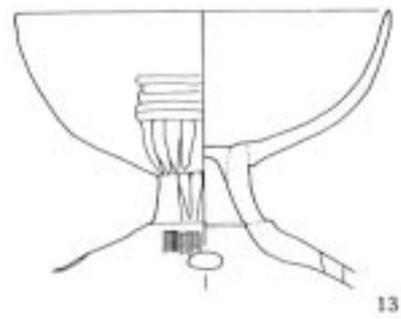
第1郭の西側ほぼ中央から出土した鉄蓋である。これには、環状の把手が取り付けられていることなどから、鉄瓶の蓋と考えられる。直径約11.4cmの円形の蓋の3分の1を欠失したものであり、内外面に木炭の付着がみられた。

#### d 鉄滓

第1郭の西側ほぼ中央から出土した鉄滓である。大小4つを数え、最大のものは812gを量る。いずれも多孔質で粗雑であり、砂粒及び木炭の付着が認められる。この鉄滓及び上記の鉄蓋に、木炭が付着していることから、城内で簡単な鍛冶を行っていた可能性も考えられる。



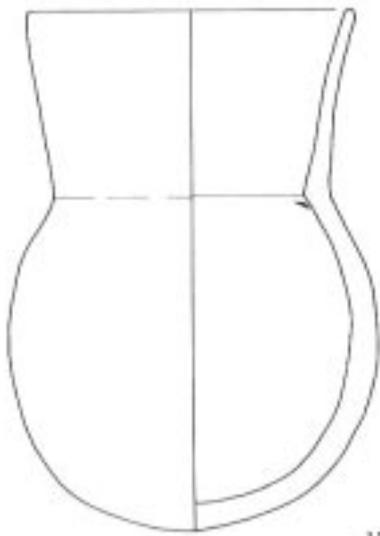
16



13



14



15



18



17



第 19 図 竪穴式住居跡関係土器実測図

## 2. 竪穴式住居跡

### 土器13 (第19図)

第1号住居跡から出土したもので、脚端部をわずかに欠失する高坏である。坏部の口径12.3cm、高さ5.0cmを測る。脚部の詳細は不明であるが、高坏の現存する全体の高さは9.0cmである。口縁部は、器壁をわずかに減少させながら内湾気味に外上方へのび、口縁端部は丸くおさめている。また、円筒上の脚部につづく裾部は大きく外反している。この裾部には径1.2cm程の円孔が4か所、上方から下方に向けて穿たれている。

この高坏には少なくとも2か所の接合痕が認められ、接合後ヘラ研磨を丹念に繰り返している。坏部の下半から脚部にかけての研磨はやや粗雑であり、下地のヘラ削り痕、ハケ目などが観察される。また、脚部内面の仕上げは比較的よく、ナデ調整が施こされている。

胎土は若干の砂粒を含むが、非常に緻密で精選されており、色調は赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

### 土器14 (第19図)

第2号住居跡から出土したもので、器高12.8cm、口径12.6cm、器高の中央やや上半で最大胴径11.8cmを測る小ぶりの丸底壺である。口縁部はくの字に外反し、口縁端部にいくに従って器壁を減少させつつ、丸くおさめている。また、頸部の下端には頸部と胴部の接合の際に施こされたヘラ削りの結果と考えられる段が顕著に認められ、胴部はほぼ球形を成している。

頸部から口縁部にかけては横方向のナデ調整が施され、口縁部内面は上下方向にヘラナデ調整が行なわれている。また、胴部内面にはハケ目が観察される。

胎土は石英砂粒を含み、色調は明黄褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

### 土器15 (第19図)

第2号住居跡から出土した長頸壺で、器高16.5cm、口径10.5cm、最大胴径は胴部下半にもち径12.2cmを測る。口縁部はわずかに外反し、口縁端部にいくに従って器壁をわずかに減少させつつ丸くおさめ、胴部は球形を成しており丸底である。

調整方法は内外面とも器壁の摩滅が著しいため定かでない。

胎土は石英・長石の砂粒を含み、色調は明黄褐色を呈し、焼成は軟調である。

### 土器16 (第19図)

第1郭の西方、石段状遺構の南3m、原地形が尾根頂部から緩斜面になっている堆積土中から出土したもので、器高25.8cm・口径15.2cm、器高の中央やや上半で最大胴径19.8cmを測り、底部は平底で径4.0cmの甕形土器である。口縁部はくの字に外反し、口縁端部は平らにおさめている。

口縁部外面はくし歯状の工具で整形した後、横方向のナデ調整を施こし、口縁部内面もナデ調整を行なっている。また胴部外面はハケ目調整を施こし、後にナデ調整を行なっている。胴部内面については頸部付近までヘラ削りを施している。

胎土は砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は軟調である。

### 土器17 (第19図)

土器16と同一地点からの出土であるが、底部のみの検出であるため全体の器形は明らかでない。

この土器は、現高4.5cm、底部は平底で径3.0cmを測る。胎土は石英砂粒を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は軟調である。

**土器18** (第19図)

第4郭の堆積土中から検出したもので、土器17と同様底部のみの出土であるため、全体の器形は不明である。

この土器は、現高5.0cm、底部は平底で5.0×4.0cm楕円形を成している。

胎土は若干砂粒を含むが緻密であり、色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。

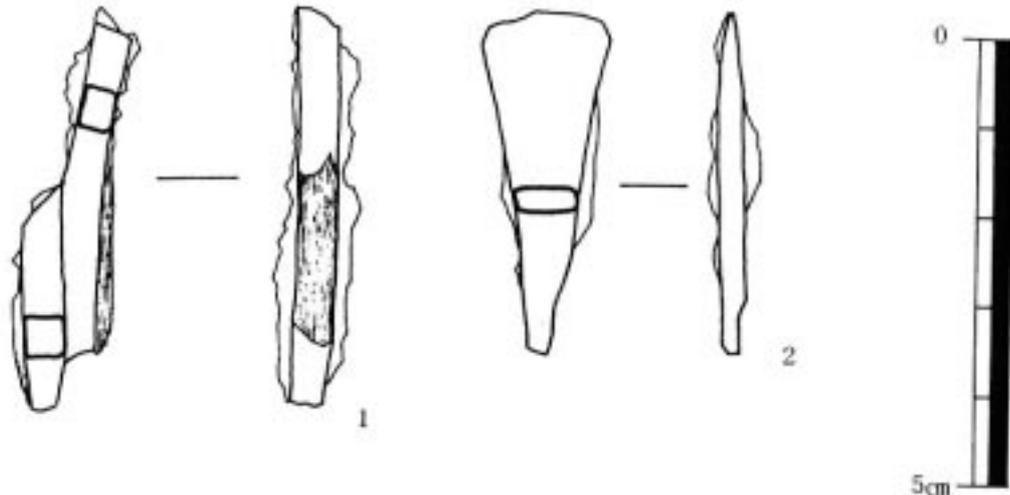
**鉄製品** (第20図)

1は第1号住居跡から出土したもので、断面は0.5×0.6cm、現存長は4.3cmを測り、角棒状を呈している。

鉄製品の形状及び大きさ、あるいは、鉄片の一部に付着が見られることなどから、鉄鏃の茎の一部と考えられる。

2は第2号住居跡から出土したもので、この鉄製品は、その形状より鉄鏃の刃部と考えられる。現存する各部の計測値は、長さ3.8cm、刃部の幅1.5cm、刃部の厚さ0.2cmを測るものであるが、茎部を欠損しているため、篋被の有無、着柄法は不明である。なお、鉄鏃の形態は、円頭広根斧箭式に分類されるものである。(注)

(注) 西駿考古学研究会「瀬戸古墳群」1968



第20図 竪穴式住居跡出土鉄製品実測図

# V ま と め

## 1. 竪穴式住居跡について

本遺跡発見の竪穴式住居跡の概要は既述のとおりである。しかし、沼田町域での住居跡としては初見である点で、この遺跡のもつ意味は大きい。従来、古代集落跡の分布の様相が知られていたのは、太田川下流域東岸に限られていた。これらの地域では、太田川に注ぐ小河川が形成する河谷を囲む低丘陵上に、集落が営まれている例が多い。そこで今回の住居跡の発見が、沼田町域でも、太田川下流域東岸と同様の分布状況を推定させる端緒となったことは意義深い。

さて、本住居跡との関係が明らかな土器は、土器13・14・15の3点だけである。土器13は、精製された高坏であり、第1号住居跡から出土したものである。土器14・15は、粗製の壺と長頸壺で、第2号住居跡から出土したものである。このように出土土器の量が少ないため、本住居跡の年代をただちに決定することは困難である。しかし、3点の土器についてみると、土器13は坏部が椀形を呈し、器壁外面に丁寧なヘラ研磨が施され、さらに脚柱部が短かく、裾部に4個の円孔が穿たれているなどの特徴を有している。また、土器14・15はいずれも胴部がほとんど球形を呈し、底部は丸底であり、土器14は口縁部内面にヘラナデ調整が施され、胴部内面に丁寧なハケ目が認められるなど土師器的色彩を有している。しかし、土器14・15の胎土や焼成は悪く、古い特徴を残している。以上の点から、これらの土器はいずれも弥生時代最終末から古墳時代初頭に位置するものと考えられようが、太田川下流域でのこれらの土器の類列に乏しいため、今後資料の増加を待って再考する必要がある。

## 2. 国重城跡について

国重城跡は、芸藩通志に「伴村にあり、武田氏の族、国重といへる人、所居といふ。」とあるとおり(注1)、武田氏の一族の城跡と考えられる。国重氏は、安芸国守護武田信賢の次男信恒の代に伴の国重に居住し、その子信正のときに地名をとって国重氏と称するようになったという(注2)。武田信賢が15世紀中頃の安芸国守護として存在している(注3)ことから考えて、国重城跡は、15世紀中頃から後半にかけて築かれた山城であろうと推測できる。

国重氏は、信正の代の永正11・12年(1514～5)頃に武田元繁に叛き毛利氏に従っている(注4)。この時期は、厳島神主職の跡目争いの最中にあたり、武田氏が大内氏・毛利氏等から攻撃を受け、その勢力が衰退していく時期に当る。さらに大永14年(1517)には武田元繁が有田合戦で戦死し、武田氏の勢力はいよいよ衰微し、結局天文10年(1541)武田氏が滅びる。その後、毛利氏が広島湾頭の統一を進める過程で、国重氏は毛利方として活躍している。

さて、武田氏滅亡前の武田氏の勢力の及ぶ範囲は山城の分布である程度推測できる(第1図)。武田氏は銀山城を本拠としていたが、銀山城は、芸藩通志によれば武田信宗のときに築城したとされており(注5)、これは鎌倉時代末期に当たっている。銀山城の北西側には、武田氏の一族である伴氏の伴城、国重氏の国重城が位置している。伴城の築城年代については不明であるが、伴氏の名が「安芸国国人連署契状」の中にみえることから、14世紀から15世紀初頭には伴の地を支配していたと考えられよう。また、伴から北の安佐町久地を結ぶ道路の西の山頂には、芸藩通志に「武田弾正拠守す。」とある獄城が位置する(注6)。武田弾正の出自については不明であるが、武田の姓をもっており、武田氏との関係が考えられる。銀山城の東

方には、太田川を隔てて戸坂城がある。城主は芸藩通志によると戸坂入道道海とあり、武田の家臣とされている(注7)。南には己斐氏の己斐新城が存在する。己斐氏は、芸藩通志に己斐豊後守の名がみえ(注8)、また、陰徳太平記有田合戦の項で武田氏に従った者の中にその名がみえることから武田氏の家臣と考えられる。これら山城を結ぶ線の内側が武田氏の最も勢力の及ぶ範囲であったろうと考えられる。国重城跡は、この武田氏の勢力範囲のうちでも武田山の北西直下にあり最も重要な地域の一つに位置していたことになる。

次に、国重城跡の構成、機能等について考えてみたい。本城跡からは、既に述べたとおり、4つの郭と3つの縦堀、1つの空堀を確認し、さらに、1つの郭と2つの縦堀が想定できた。郭内からは、柵列2カ所、石垣1カ所、礎石建物跡1軒分を検出した。

本城跡の郭配置は、主郭と考えられる第1郭の南半分を第5郭、第2郭、第3郭が囲むように配置されており、さらに第3郭の西には第4郭を配している。第3郭の南に尾根を断ち切る空堀がある。第1郭北半は急傾斜になっており、郭は認められない。北東側には第5郭に連結する小径がみられた。また、北東側は、安川の後背地に水田面が広がり、北面側は隣接する尾根が国重城跡前方まで延び、視野をさえぎっている。加えて旧山陽道が安川の対岸を通っており。中世の主要道もほぼ同じ場所を通っていたと考えられる。以上のことから、本城跡が北東側を意識して築城されたものであることがわかる。第1郭は、他の郭に比して非常に広く、それに伴う防御施設として、西側に柵列を検出したのみであった。第5郭・第2郭・第3郭は、ほとんど同一レベルで連絡されており、帯郭的に使用され、既に述べたとおり、第3郭北側で第1郭と連絡していたと考えられる。しかし、第3郭南側の三角形のプランを呈す部分について考えてみると、この部分は本城跡の搦手に当り扇の要ともいえる重要な部分であるが、この部分の防御能力が低いという観は否めない。このため、第5郭から第3郭までの間の防御施設としては、第5郭と第2郭の間を武者走り様に狭い通路とし、第2郭・第3郭は、縦堀5によって切断し、さらに、第3郭に柵列を設けてこの一連の郭の防御能力を高めている。第4郭は、縦堀で3つの小郭に区画されているが、各小郭の面積は狭小であり、第3郭との連絡施設も認められないことなど、実質的機能をどれほど果たしたかは疑問である。このように見てくると、本城跡を実戦的な山城と言うことは難しいと考えられる。

さらに、後世耕作が行われ第1郭から多量の石材が持ち去られている(注9)。これらの石材は、第2郭に礎石建物があることから礎石とも考えることができる。以上のように本城跡は、実戦的な山城ではなく、第1郭が余りに広く、礎石の存在をうかがわせるなど居館城の色彩が濃い。また、付近に土居屋敷の存在をうかがわせる地名・地形がみあたらないこともその傍証となろう。

さて、本城跡の築城年代について概観してみると、本城跡出土遺物のうち年代を推定し得るものは、第2郭・第3郭及び空堀から出土した備前焼の4点に留まる。これらはいわゆる玉縁を呈し、その形態から15世紀乃至16世紀のものと考えられ(注10)、前述の文献からの推定による築城年代と符合すると考えられる。

なお、国重城跡の使用時期の下限については、毛利氏の萩転封に伴って国重氏が萩へ移住する頃に求められよう。

注1. 芸藩通志卷四十八。

注2. 沼田町史 広島市市史編纂室編。昭和55年

注3. 吉川家文書による。

注4. 注2に同じ。

注5. 注11に同じ。

注6. 注11に同じ。

注7. 芸藩通志卷四十二。

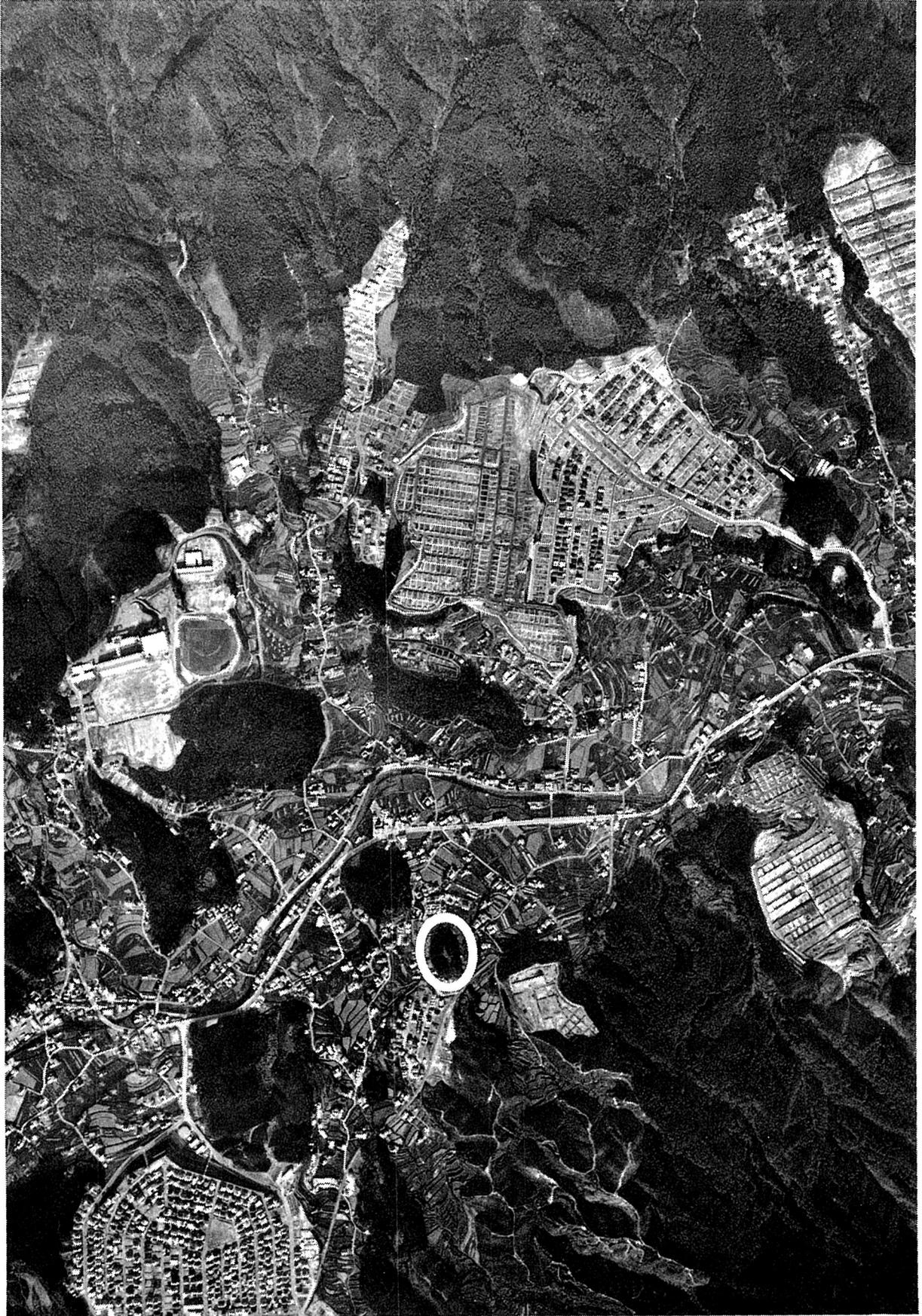
注8. 芸藩通志卷五十五。

注9. 聞き取り調査による。

注10. 安西高等学校教諭加藤光臣氏の教示による。

圖

版



国重城跡航空写真



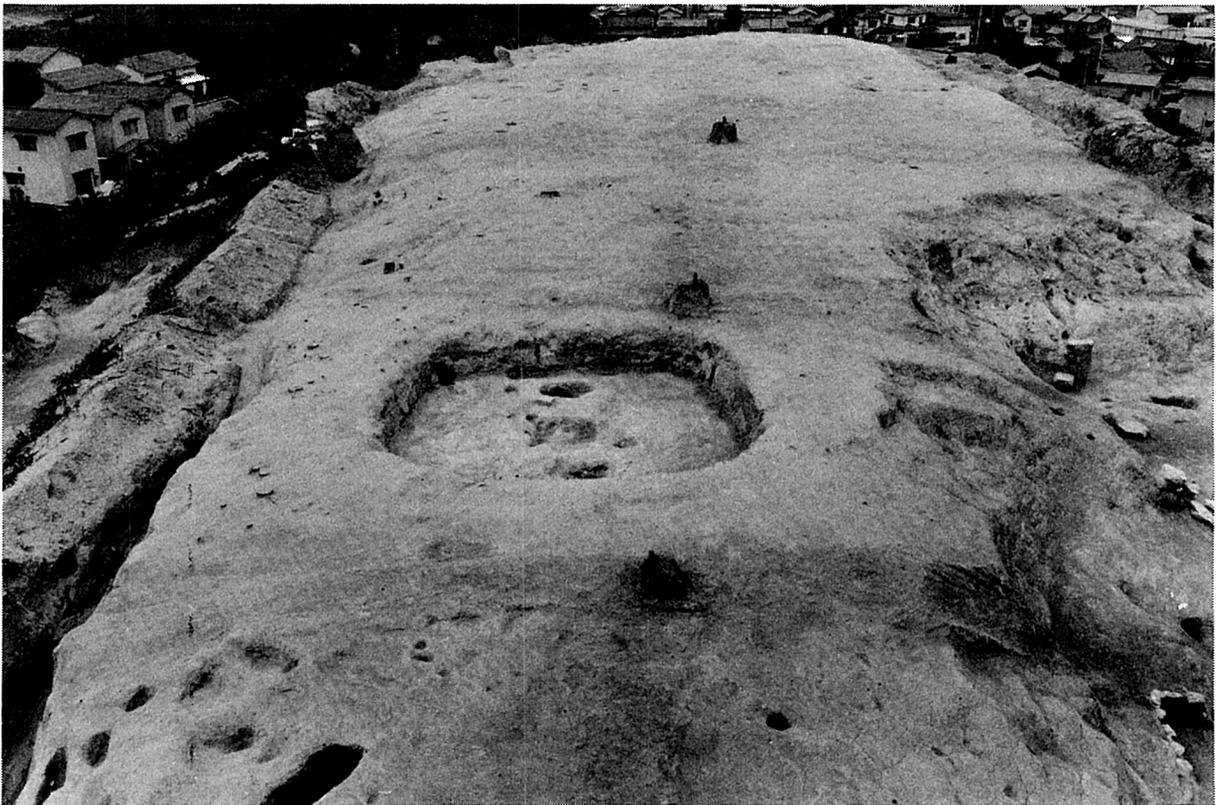
1. 遺跡遠景（北から）



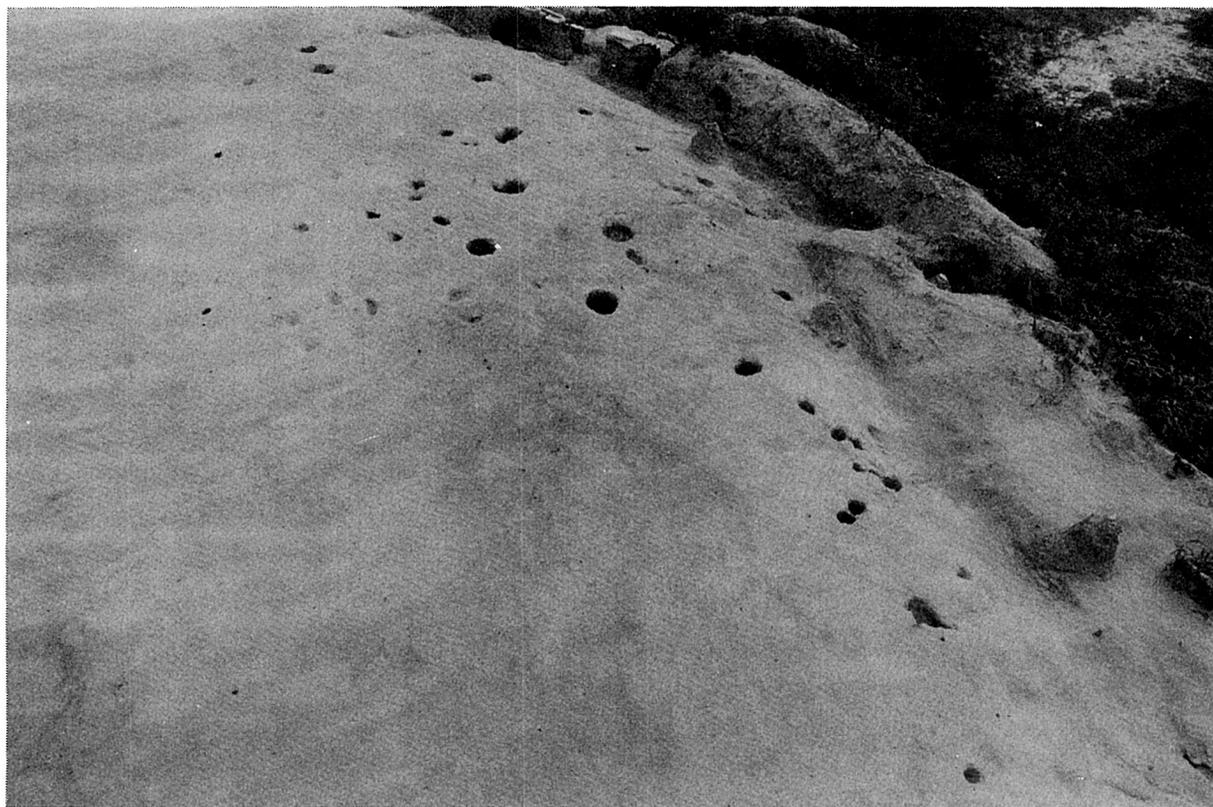
2. 遺跡近景（東から）



1. 第1郭 完掘後（北から）



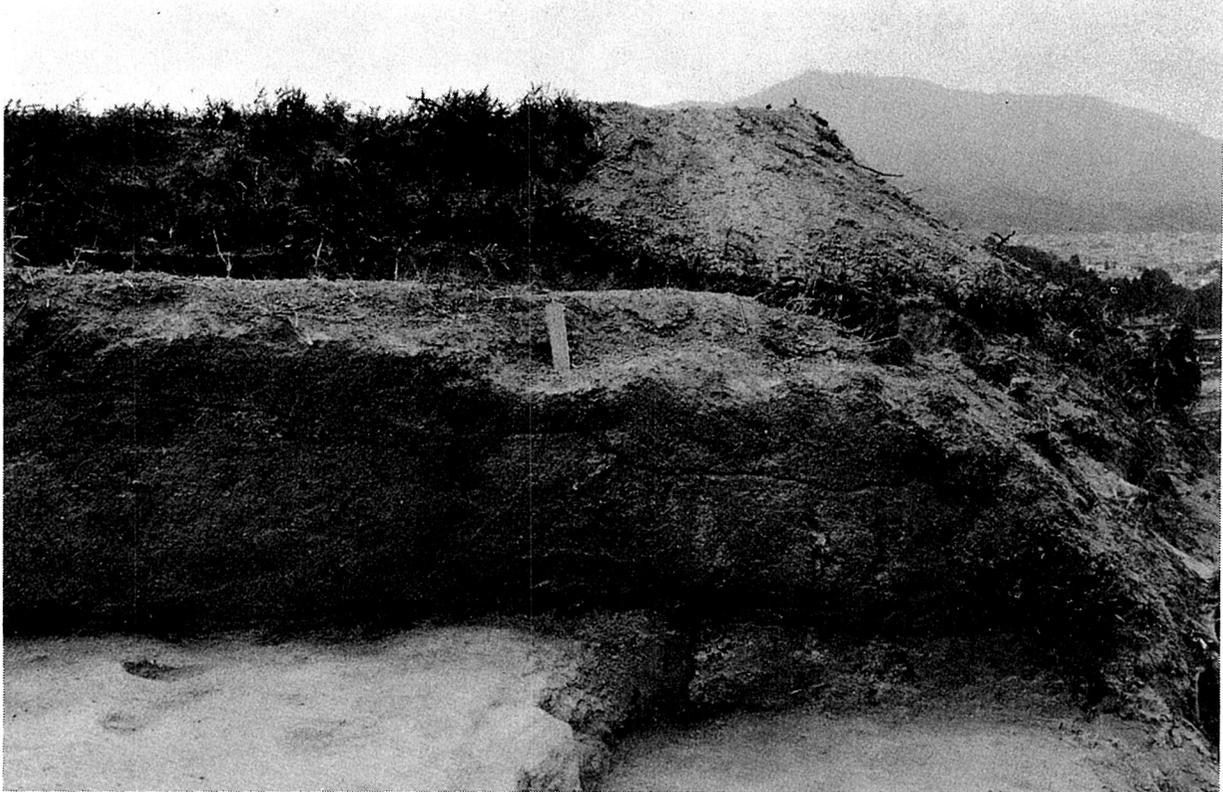
2. 第1郭 完掘後（南から）



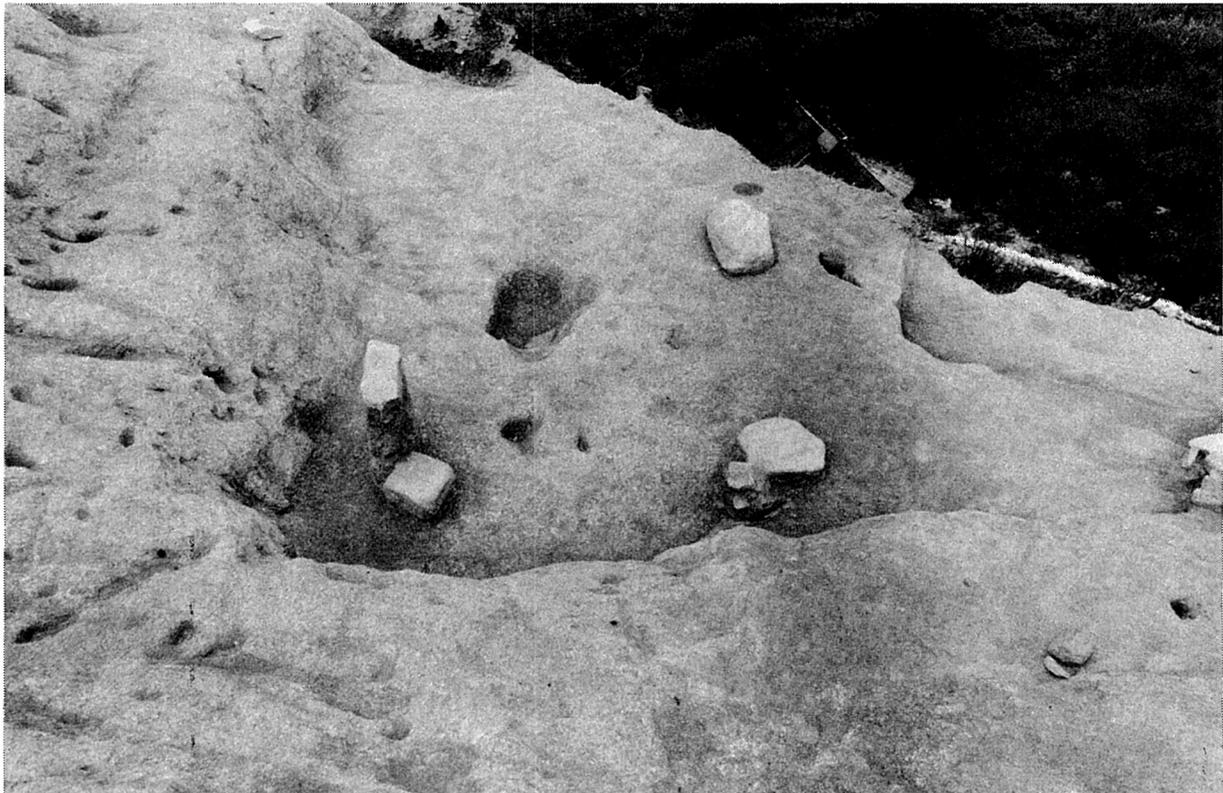
1. 第1郭柱穴列（北から）



2. 第1郭石段状遺構完掘後（西から）



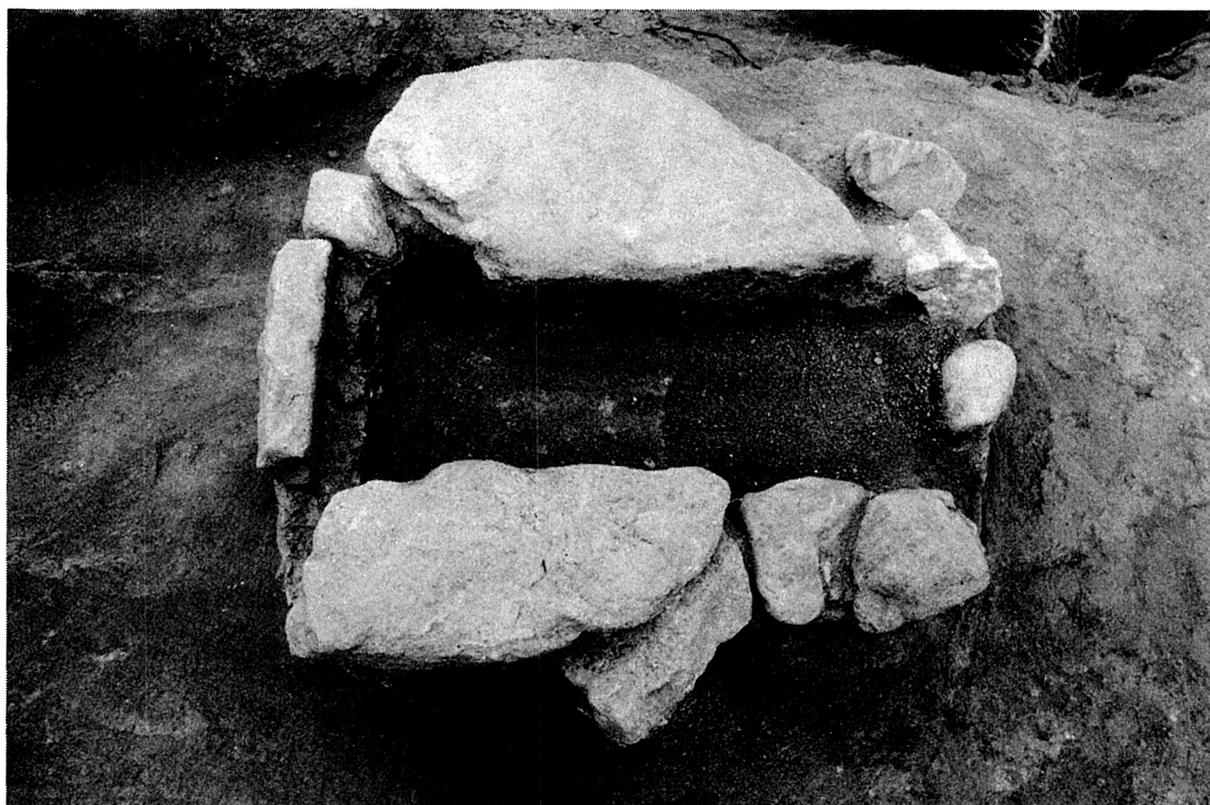
1. 第2郭 断面（南から）



2. 第2郭 礎石完掘後（西から）



1. 第2郭石垣状遺構完掘後



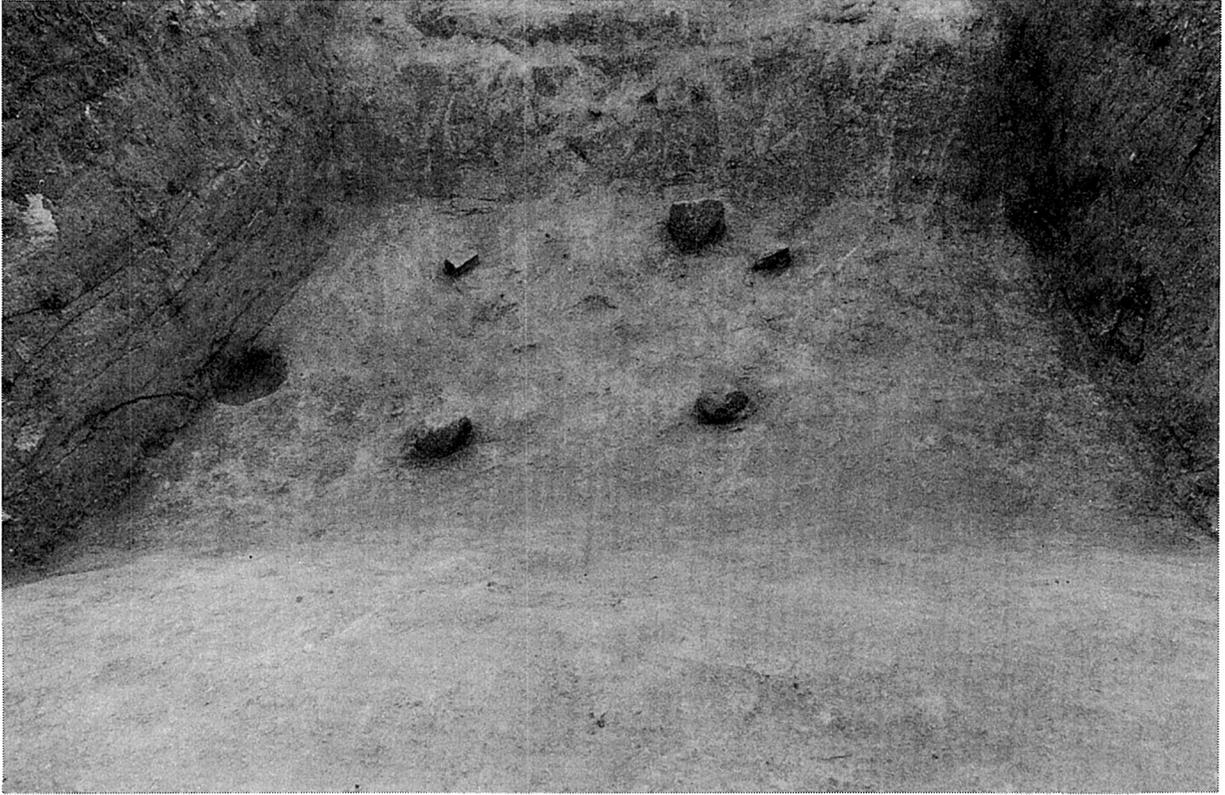
2. 第2郭コの字型配石遺構



1. 第3郭 柱穴列（東側部分）



2. 第3郭 柱穴列（西側部分）



1. 空堀（北から）



2. 縦堀1完掘後（西から）



1. 縦堀 2 完掘後 (東から)



2. 第1号竪穴式住居跡 (南から)



1. 第2号竖穴式居住跡（南から）



2. 高坏出土状態（北から）



1



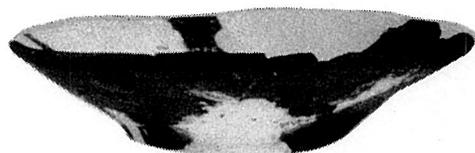
2



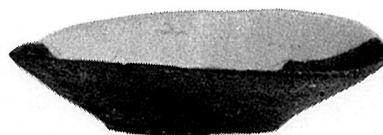
3



4



5

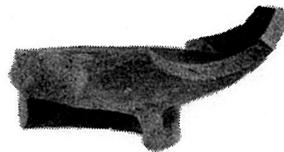
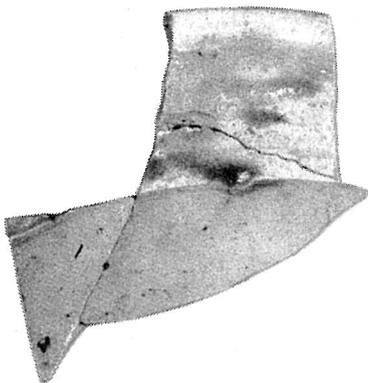
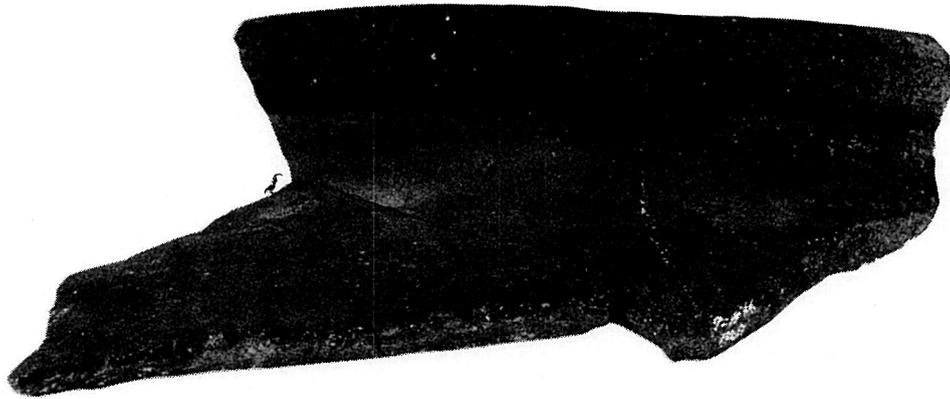


6



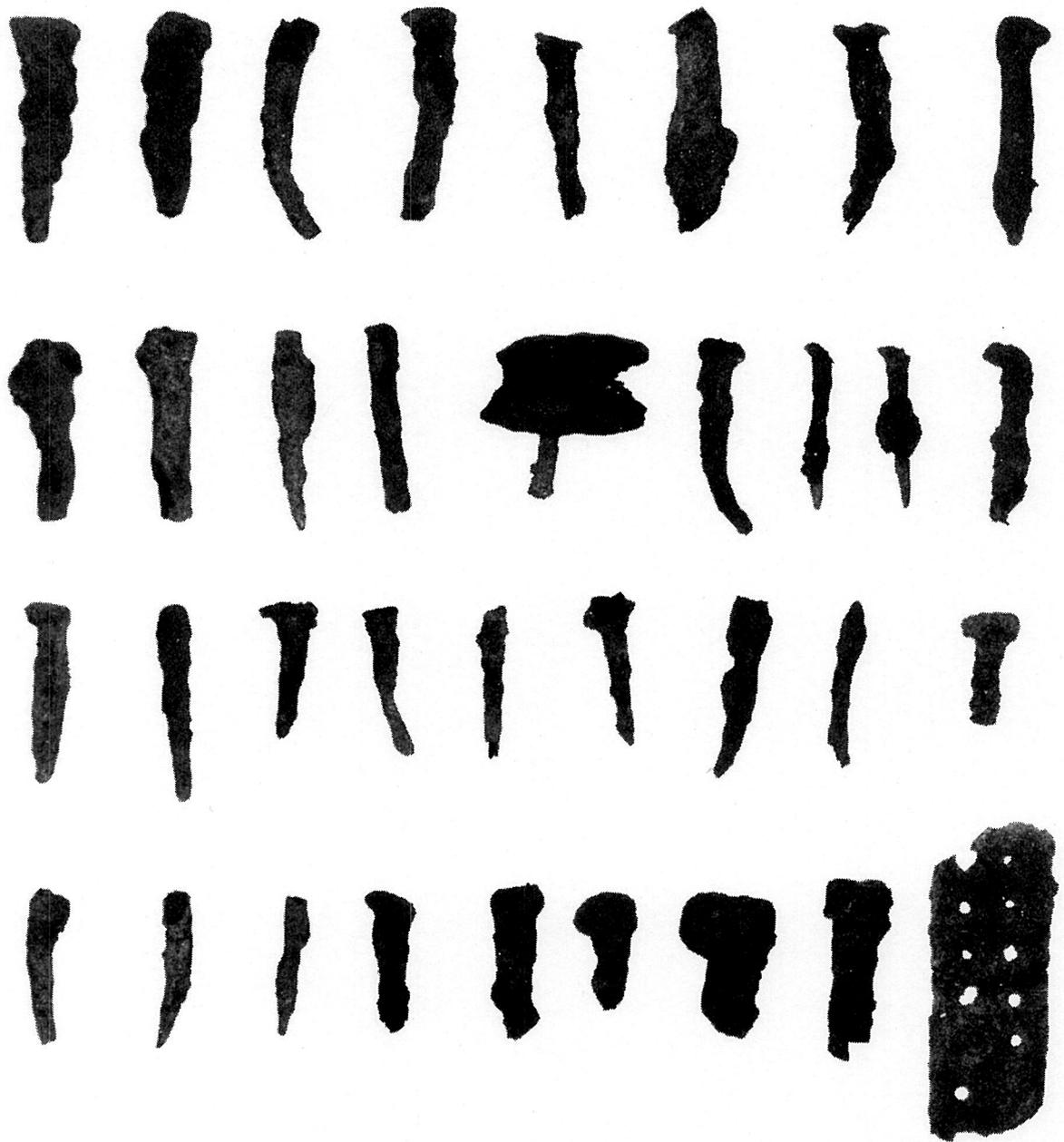
7

土師質土器

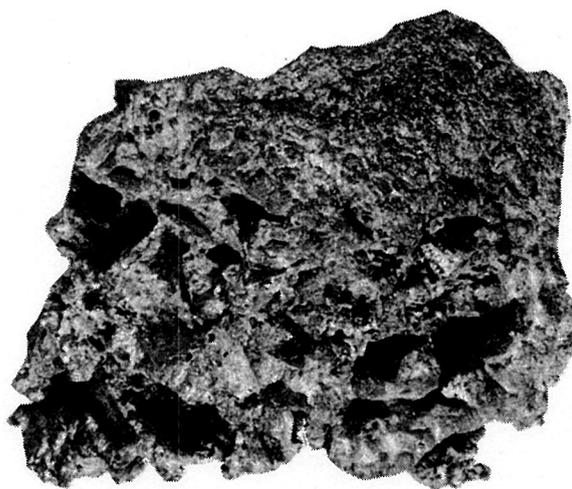
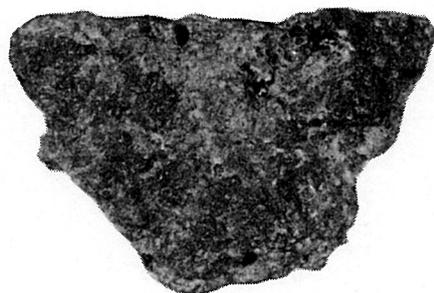
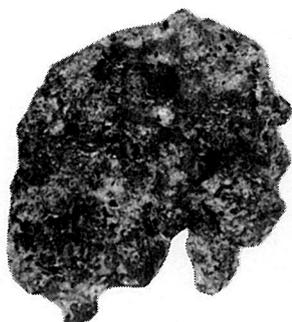




鉄 釘



鉄釘及び小札状鉄製品



鉄蓋及び鉄滓



① 堅穴式住居跡出土土器



2. 堅穴式住居跡出土鉄製品

広島市の文化財 第19集

広島市安佐南区沼田町所在

**国重城跡発掘調査報告**

1982年3月

編集発行 広島市教育委員会  
(社会教育部社会教育課)  
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号  
TEL (082) 245-2111 (代)

印刷所 電子印刷株式会社  
広島市中区堺町一丁目1番5号  
TEL (082) 232-3770